

有価証券報告書

(金融商品取引法第24条第1項に基づく報告書)

事業年度	自	平成28年4月1日
(第57期)	至	平成29年3月31日

株式会社 ゼンリン

(E00717)

第57期（自平成28年4月1日 至平成29年3月31日）

有 価 証 券 報 告 書

- 1 本書は金融商品取引法第24条第1項に基づく有価証券報告書を、同法第27条の30の2に規定する開示用電子情報処理組織(EDINET)を使用して、平成29年6月19日に提出したデータに目次及び頁を付して出力・印刷したものであります。
- 2 本書には、上記の方法により提出した有価証券報告書の添付書類は含まれておりませんが、監査報告書及び内部統制報告書は末尾に綴じ込んでおります。

株式会社 ゼンリン

目次

	頁
表紙	1
第一部 企業情報	2
第1 企業の概況	2
1. 主要な経営指標等の推移	2
2. 沿革	4
3. 事業の内容	5
4. 関係会社の状況	7
5. 従業員の状況	9
第2 事業の状況	10
1. 業績等の概要	10
2. 生産、受注及び販売の状況	11
3. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等	12
4. 事業等のリスク	14
5. 経営上の重要な契約等	19
6. 研究開発活動	20
7. 財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析	21
第3 設備の状況	24
1. 設備投資等の概要	24
2. 主要な設備の状況	25
3. 設備の新設、除却等の計画	28
第4 提出会社の状況	29
1. 株式等の状況	29
(1) 株式の総数等	29
(2) 新株予約権等の状況	31
(3) 行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等	31
(4) ライツプランの内容	31
(5) 発行済株式総数、資本金等の推移	31
(6) 所有者別状況	31
(7) 大株主の状況	32
(8) 議決権の状況	33
(9) ストックオプション制度の内容	33
(10) 従業員株式所有制度の内容	34
2. 自己株式の取得等の状況	35
3. 配当政策	36
4. 株価の推移	37
5. 役員の状況	38
6. コーポレート・ガバナンスの状況等	41
第5 経理の状況	50
1. 連結財務諸表等	51
(1) 連結財務諸表	51
(2) その他	90
2. 財務諸表等	91
(1) 財務諸表	91
(2) 主な資産及び負債の内容	101
(3) その他	101
第6 提出会社の株式事務の概要	102
第7 提出会社の参考情報	103
1. 提出会社の親会社等の情報	103
2. その他の参考情報	103
第二部 提出会社の保証会社等の情報	104
監査報告書	
当連結会計年度（平成29年3月期）	105
当事業年度（平成29年3月期）	109
内部統制報告書	111

【表紙】

【提出書類】	有価証券報告書
【根拠条文】	金融商品取引法第24条第1項
【提出先】	関東財務局長
【提出日】	平成29年6月19日
【事業年度】	第57期（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）
【会社名】	株式会社ゼンリン
【英訳名】	ZENRIN CO., LTD.
【代表者の役職氏名】	代表取締役社長 高山善司
【本店の所在の場所】	福岡県北九州市小倉北区室町一丁目1番1号
【電話番号】	093(882)9052
【事務連絡者氏名】	経理部長 藤本泰生
【最寄りの連絡場所】	福岡県北九州市戸畑区中原新町3番1号
【電話番号】	093(882)9052
【事務連絡者氏名】	経理部長 藤本泰生
【縦覧に供する場所】	株式会社東京証券取引所 （東京都中央区日本橋兜町2番1号） 証券会員制法人福岡証券取引所 （福岡市中央区天神二丁目14番2号）

第一部【企業情報】

第１【企業の概況】

１【主要な経営指標等の推移】

(1) 連結経営指標等

回次	第53期	第54期	第55期	第56期	第57期
決算年月	平成25年 3 月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月
売上高 (百万円)	54,991	53,589	52,286	54,970	57,819
経常利益 (百万円)	5,076	3,663	2,751	3,427	4,527
親会社株主に帰属する 当期純利益 (百万円)	1,835	1,272	1,464	1,610	2,462
包括利益 (百万円)	2,725	2,023	3,502	768	3,218
純資産額 (百万円)	37,663	37,939	41,963	41,496	43,463
総資産額 (百万円)	56,376	57,989	61,322	59,810	65,150
1株当たり純資産額	984円91銭	992円03銭	1,094円70銭	1,094円22銭	1,146円51銭
1株当たり当期純利益	49円93銭	34円77銭	40円61銭	44円21銭	67円11銭
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	63.9	61.7	64.4	67.1	64.6
自己資本利益率 (%)	5.2	3.5	3.9	4.0	6.0
株価収益率 (倍)	25.6	30.0	36.5	51.1	35.3
営業活動による キャッシュ・フロー (百万円)	8,242	4,136	7,122	8,604	9,318
投資活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△4,977	△7,703	△4,761	△4,945	△5,313
財務活動による キャッシュ・フロー (百万円)	△2,153	1,612	△2,931	△4,900	△2,248
現金及び現金同等物の 期末残高 (百万円)	8,154	6,456	6,393	5,099	6,817
従業員数 〔外、正社員以外の 平均雇用者数〕 (人)	3,056 〔796〕	2,969 〔772〕	2,994 〔812〕	3,010 〔833〕	2,960 〔829〕

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

3 従業員数は、就業人員数を記載しております。

4 第57期の1株当たり純資産額の算定上、「役員株式給付信託（ＢＢＴ）」及び「従業員株式給付信託（Ｊ－ＥＳＯＰ）」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社（信託Ｅ口）が保有する当社株式を期末発行済株式総数から控除する自己株式に含めております。また、第57期の1株当たり当期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております。

(2) 提出会社の経営指標等

回次	第53期	第54期	第55期	第56期	第57期
決算年月	平成25年 3 月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月
売上高 (百万円)	37,856	36,286	35,423	36,978	39,348
経常利益 (百万円)	3,182	2,462	1,551	3,307	3,942
当期純利益 (百万円)	721	1,355	679	2,204	2,659
資本金 (百万円)	6,557	6,557	6,557	6,557	6,557
発行済株式総数 (千株)	38,200	38,200	38,200	38,200	38,200
純資産額 (百万円)	30,926	30,683	31,860	33,983	35,505
総資産額 (百万円)	43,649	44,809	45,775	46,703	50,885
1株当たり純資産額	846円25銭	850円80銭	883円46銭	926円30銭	967円81銭
1株当たり配当額 (うち1株当たり 中間配当額)	30円 (15円)	30円 (15円)	31円 (15円)	32円50銭 (15円50銭)	34円50銭 (17円)
1株当たり当期純利益	19円64銭	37円05銭	18円84銭	60円51銭	72円50銭
潜在株式調整後 1株当たり当期純利益	—	—	—	—	—
自己資本比率 (%)	70.9	68.5	69.6	72.8	69.8
自己資本利益率 (%)	2.3	4.4	2.2	6.7	7.7
株価収益率 (倍)	65.1	28.1	78.7	37.4	32.6
配当性向 (%)	152.7	81.0	164.5	53.7	47.6
従業員数 〔外、正社員以外の 平均雇用者数〕 (人)	2,022 〔702〕	2,031 〔690〕	2,005 〔618〕	1,979 〔634〕	1,941 〔616〕

(注) 1 売上高には、消費税等は含まれておりません。

2 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

3 従業員数は、就業人員数を記載しております。

4 第57期の1株当たり純資産額の算定上、「役員株式給付信託(BBT)」及び「従業員株式給付信託(J-E SOP)」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社(信託E口)が保有する当社株式を期末発行済株式総数から控除する自己株式に含めております。また、第57期の1株当たり当期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております。

2 【沿革】

年月	概要
昭和49年 3 月	住宅地図・各種地図・図書等の企画出版を目的とする株式会社善隣を北九州市小倉区に設立（組織変更、資本金10百万円）
昭和58年 7 月	株式会社善隣を株式会社ゼンリンに商号変更
昭和58年 8 月	株式会社善隣出版社及び日本住宅地図出版株式会社を吸収合併し、札幌、仙台、東京、名古屋、大阪他全国各地の事業所を引継ぎ地図情報企業として全国展開が可能な体制を確立
昭和59年 5 月	株式会社日立製作所と共同で「住宅地図製作自動化システム」を確立、さらに「住宅地図情報利用システム」を開発
昭和60年11月	株式会社日立製作所及び株式会社写研との共同により、文字・図形情報を入力した磁気テープから直接印刷用の刷版を作る「レーザー製版システム」を開発
昭和61年11月	地図情報のデータベース「Zmap電子地図」及びソフトウェアプログラム「Zmap-PC」を開発
昭和63年 1 月	東京都23区の「Zmap電子地図」及びソフトウェアプログラム「Zmap-PC」を発売開始（以降、政令指定都市を重点に全国に拡販）
平成 2 年 3 月	外注先である株式会社天地堂印刷製本所（現、株式会社ゼンリンプリンテックス（連結子会社））を事業の緊密性を図り、製版・印刷の効率化を高めるため子会社化
平成 3 年10月	汎用化を狙ったカーナビゲーション用のナビゲーションシステム研究会の統一規格に沿ったソフト「ナビソフト」を開発
平成 4 年 5 月	作業の効率化を図るため、生産本部の一部（製版・印刷・製本部門）を株式会社ゼンリンプリンテックス（連結子会社）へ移管
平成 4 年 6 月	全国版・関東リゾートガイド等の「ゼンリン・ナビソフト」を新発売
平成 4 年12月	北九州市戸畑区に「ゼンリントクノセンター」を竣工、開発本部が当センターに集結
平成 6 年 9 月	福岡証券取引所に上場
平成 8 年 9 月	東京証券取引所市場第二部に上場
平成 9 年 1 月	電子地図事業の生産効率化を図るため、株式会社ダイケイ（連結子会社）及び同社の子会社である上海大計数据处理公司（連結子会社）を子会社化
平成12年 4 月	電子地図の北米海外拠点として、ZENRIN USA, INC.（連結子会社）をアメリカに設立 電子地図のインターネット配信事業のため、株式会社ゼンリンデータコム（連結子会社）を設立
平成13年 8 月	電子地図の立体映像技術の研究、開発のため、株式会社ジオ技術研究所（連結子会社）を設立
平成14年 7 月	CD-ROM版住宅地図「デジタウン」を新発売
平成16年 9 月	当社グループ内での事業変革に対する機動性、柔軟性を高めるため、株式会社ダイケイ（連結子会社）を完全子会社化
平成17年10月	電子地図の欧州海外拠点として、ZENRIN EUROPE GmbH（連結子会社）をドイツに設立
平成18年 3 月	東京証券取引所市場第一部に上場
平成25年 3 月	東京都千代田区に東京本社を設置
平成26年 5 月	本社を北九州市小倉北区から同市戸畑区に移転
平成26年10月	地図情報の新たな利活用やプロモーションを実現することで、当社グループの更なる基盤強化を図るため、株式会社ゼンリンビズネクス（連結子会社）を子会社化
平成28年 4 月	GIS事業を強化するため、GISマーケティング事業会社である、株式会社ゼンリンジオインテリジェンス（連結子会社）を子会社化
平成28年 9 月	海外事業を中心とした事業強化のため、Abalta Technologies, Inc.（連結子会社）及び同社の子会社であるAbalta Technologies EOOD（連結子会社）を子会社化

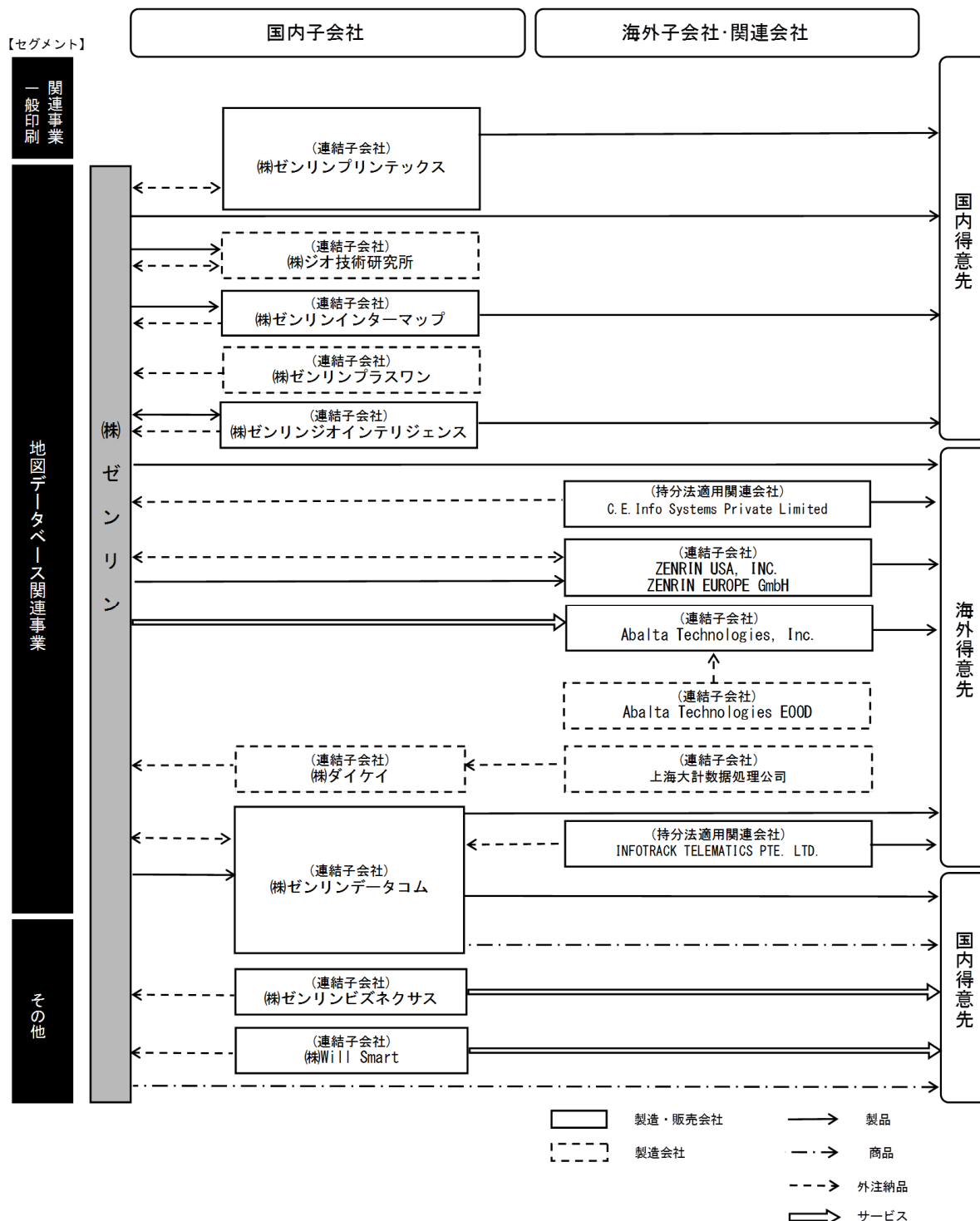
3 【事業の内容】

当社グループは、当社、子会社14社（うち連結子会社14社）、関連会社3社（うち持分法適用関連会社2社）で構成され、地図データベース及び一般印刷物の製造販売並びにこれらに附帯・関連する事業活動を展開しております。

当社グループの事業に係る位置づけは、次のとおりであります。

セグメントの名称	主要品目等	業務内容	会社名
地図データベース 関連事業	住宅地図帳	製造・販売	当社、(株)ジオ技術研究所、 (株)ゼンリンジオインテリジェンス、 ZENRIN USA, INC.、ZENRIN EUROPE GmbH、 C.E.Info Systems Private Limited
	応用地図	製版・印刷・製本	(株)ゼンリンプリンテックス
	住宅地図データベース	校正・文字入出力	当社、(株)ゼンリンプリンテックス
	スマートフォン向け サービス	調査・編集	当社
		企画・編集	当社、(株)ゼンリンプラスワン
	インターネットサービス 向け地図データ	受託・開発	当社、(株)ゼンリンデータコム、 Abalta Technologies, Inc.、 Abalta Technologies EOOD、 INFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD.
	カーナビゲーション用 データ		
	3D地図データ	データ作成・入力	当社、(株)ダイケイ、(株)ジオ技術研究所、 (株)ゼンリンインターマップ、 上海大計数据处理公司
	その他地図データ		
		データ配信	当社、(株)ゼンリンデータコム
一般印刷関連事業	一般印刷物	製造・販売・ 校正・文字入出力	(株)ゼンリンプリンテックス
その他	仕入商品	販売	当社、(株)ゼンリンデータコム、(株)Will Smart
	デジタルサイネージ	企画・開発・ 運営・販売	(株)Will Smart
	ダイレクトメール発送 代行 インシップ（同封・ 同梱）広告	企画・編集・発送	(株)ゼンリンビズネクサス

事業の系統図は、次のとおりであります。



- (注) 1 当社は、平成28年4月1日に㈱ゼンリンジオインテリジェンス（旧㈱JPSマーケティング）の株式を取得し、連結子会社といたしました。
- 2 当社は、平成28年9月12日にAbalta Technologies, Inc.の株式を取得し、同社及びその子会社であるAbalta Technologies EOODを連結子会社といたしました。
- 3 ㈱ゼンリンデータコム（連結子会社）は、平成28年5月31日に連結子会社であったINFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD.の株式の一部を売却したため、同社を連結の範囲から除外し持分法適用関連会社とするとともに、同社の子会社であるINFOTRACK TELEMATICS PRIVATE LIMITEDを連結の範囲から除外いたしました。
- 4 当社は、平成28年6月13日にダイナミックマップ基盤企画㈱（持分法非適用関連会社）に設立出資いたしました。

4 【関係会社の状況】

(連結子会社)

名称	住所	資本金 (百万円)	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
㈱ゼンリンプリンテックス ※1	北九州市 門司区	92	地図データベース 関連事業 一般印刷関連事業	100.0	住宅地図帳・応用地図の製版、印刷、製本を 受託 役員の兼任…1名
㈱ダイケイ	大阪市 西区	100	地図データベース 関連事業	100.0	電子地図データ入力業務の一部を受託 役員の兼任…1名
㈱ジオ技術研究所 ※1	福岡市 博多区	200	地図データベース 関連事業	100.0	立体映像技術の研究、開発並びに制作販売業 務の一部を受託
㈱ゼンリンインターマップ	那覇市	60	地図データベース 関連事業	100.0	電子地図の国内海外データベースの製造の一 部を受託、沖縄地区の販売代理店 役員の兼任…1名
㈱ゼンリンプラスワン	東京都 千代田区	9	地図データベース 関連事業	100.0	住宅地図帳・応用地図の編集の一部を受託 役員の兼任…1名
㈱ゼンリンビズネクサス	東京都 千代田区	100	その他	100.0	ダイレクトメールの編集、発送を受託
㈱ゼンリンジオインテリジ ェンス	東京都 千代田区	30	地図データベース 関連事業	100.0	マーケティングコンテンツ制作業務の一部を 受託 役員の兼任…1名
㈱ゼンリンデータコム ※1、2	東京都 港区	2,283	地図データベース 関連事業 その他	79.9	電子地図を利用したインターネット配信業 務、電子地図の配信業務の一部を受託 役員の兼任…2名
㈱Will Smart	東京都 中央区	186	その他	91.2 (56.2)	デジタルサイネージの調達、保守・運用業務 を受託
ZENRIN USA, INC.	アメリカ バーリンゲム市	1,380 千USD	地図データベース 関連事業	100.0	電子地図の海外データベースの製造の一部を 受託、電子地図を販売
ZENRIN EUROPE GmbH	ドイツ デュッセルドルフ市	150 千EUR	地図データベース 関連事業	100.0	電子地図の海外データベースの製造の一部を 受託、電子地図を販売
Abalta Technologies, Inc.	アメリカ トーランス市	632 千USD	地図データベース 関連事業	75.0	車載向けソフトウェア等の営業支援業務を委 託 転換社債型新株予約権付社債の被引受
上海大計数据处理公司	中国 上海市	500	地図データベース 関連事業	100.0 (100.0)	電子地図データ入力業務の一部を㈱ダイケイ を通じて受託
Abalta Technologies EOOD	ブルガリア ソフィア市	100 BGN	地図データベース 関連事業	100.0 (100.0)	_____

(注) 1 主要な事業の内容欄には、セグメント情報に記載された名称を記載しております。

2 有価証券届出書又は有価証券報告書を提出している該当会社はありません。

3 ※1 特定子会社であります。

4 議決権の所有割合欄の()内は、間接所有割合で内数であります。

5 ※2 ㈱ゼンリンデータコムについては、売上高(連結会社相互間の内部売上高を除く)の連結売上高に占める割合が10%を超えております。

主要な損益情報等	(1) 売上高	15,074百万円
	(2) 経常利益	839百万円
	(3) 当期純利益	430百万円
	(4) 純資産額	6,957百万円
	(5) 総資産額	11,260百万円

(持分法適用関連会社)

名称	住所	資本金	主要な事業の内容	議決権の 所有割合 (%)	関係内容
C.E. Info Systems Private Limited	インド ニューデリー市	1,327 百万INR	地図データベース 関連事業	18.0	電子地図の海外データベースを販売
INFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD.	シンガポール	4,167 千SGD	地図データベース 関連事業	49.0 (49.0)	_____

- (注) 1 C.E. Info Systems Private Limitedについては、持分が100分の20未満ではありますが、実質的な影響力を持っているため関連会社としております。
- 2 議決権の所有割合欄の()内は、間接所有割合で内数であります。

5 【従業員の状況】

(1) 連結会社の状況

平成29年3月31日現在

セグメントの名称	従業員数（人）
地図データベース関連事業	2,523 [790]
一般印刷関連事業	215 [30]
報告セグメント計	2,738 [820]
その他	44 [-]
全社（共通）	178 [9]
合計	2,960 [829]

(注) 1 従業員数は就業人員（当社グループ（当社及び連結子会社）からグループ外への出向者を除き、グループ外から当社グループへの出向者を含む）であり、正社員以外の雇用者数は〔 〕内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2 正社員以外の雇用者には、準社員、嘱託契約の従業員及びパートを含み、派遣社員は除いております。

(2) 提出会社の状況

平成29年3月31日現在

従業員数（人）	平均年齢（歳）	平均勤続年数（年）	平均年間給与（円）
1,941[616]	43.60	18.02	5,299,973

セグメントの名称	従業員数（人）
地図データベース関連事業	1,763 [607]
一般印刷関連事業	- [-]
報告セグメント計	1,763 [607]
その他	- [-]
全社（共通）	178 [9]
合計	1,941 [616]

(注) 1 従業員数は就業人員（当社から社外への出向者を除き、社外から当社への出向者を含む）であり、正社員以外の雇用者数は〔 〕内に年間の平均人員を外数で記載しております。

2 正社員以外の雇用者には、準社員、嘱託契約の従業員及びパートを含み、派遣社員は除いております。

3 平均年間給与は、賞与及び基準外賃金を含んでおります。

(3) 労働組合の状況

当社グループには労働組合はありません。

なお、労使関係は円満に推移しており、特記すべき事項はありません。

第2【事業の状況】

1【業績等の概要】

(1) 業績

当連結会計年度におけるわが国経済は、雇用・所得環境の改善が続ки、個人消費の持ち直しや企業収益にも改善が見られるなど穏やかな回復基調で推移いたしました。一方で、米国の新政権移行に関連する影響や、新興国経済の下振れリスクなど、依然として国内景気は不透明な状況が続いております。

このような環境の中、当社グループの連結経営成績は、売上高57,819百万円（前年同期比2,849百万円増加、5.2%増）、営業利益4,234百万円（前年同期比1,195百万円増加、39.4%増）、経常利益4,527百万円（前年同期比1,100百万円増加、32.1%増）、親会社株主に帰属する当期純利益2,462百万円（前年同期比851百万円増加、52.9%増）となりました。

セグメントの業績は、次のとおりであります。

(地図データベース関連事業)

当社グループの主力事業であります地図データベース関連事業につきましては、前年同期に計上していた自治体からの受託案件の売上などは減少いたしました。国内カーナビゲーション用データや開発受託などITS関連の売上増加に加え、住宅地図データベースを活用したGIS関連の売上も堅調に推移いたしました。費用面では、人件費や時空間情報システムの償却費などが増加いたしました。

以上の結果、当事業の売上高は49,092百万円（前年同期比2,952百万円増加、6.4%増）、セグメント利益は3,836百万円（前年同期比1,265百万円増加、49.2%増）となりました。

(一般印刷関連事業)

一般印刷関連事業の売上高は3,503百万円（前年同期比145百万円減少、4.0%減）、セグメント利益は56百万円（前年同期比25百万円減少、31.5%減）となりました。

(その他)

その他につきましては、売上高は5,222百万円（前年同期比43百万円増加、0.8%増）、セグメント利益は256百万円（前年同期比37百万円減少、12.8%減）となりました。

(2) キャッシュ・フローの状況

当連結会計年度末における現金及び現金同等物は6,817百万円（前連結会計年度末比1,718百万円増加、33.7%増）となりました。

(営業活動によるキャッシュ・フロー)

営業活動によるキャッシュ・フローは、税金等調整前当期純利益が4,226百万円となり、売上債権の増加1,605百万円、法人税等の支払額1,334百万円などの減少要因がありましたが、減価償却費5,591百万円、前受金の増加1,201百万円、未払費用の増加884百万円、のれん償却額361百万円などの増加要因により9,318百万円の収入（前年同期比713百万円増加）となりました。

(投資活動によるキャッシュ・フロー)

投資活動によるキャッシュ・フローは、有形及び無形固定資産の取得による支出4,416百万円、連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出809百万円などがあつたことにより5,313百万円の支出（前年同期比368百万円増加）となりました。

(財務活動によるキャッシュ・フロー)

財務活動によるキャッシュ・フローは、配当金の支払額1,248百万円、リース債務の返済による支出1,058百万円などがあつたことにより2,248百万円の支出（前年同期比2,651百万円減少）となりました。

2 【生産、受注及び販売の状況】

(1) 生産実績

当社グループは、地図データベースを用いた各種情報の提供を主たる事業としており、生産実績を定義することが困難であることから、生産実績につきましては記載を省略しております。

(2) 受注状況

当社グループは、主に見込み生産を行っております。一般印刷物や地図関連の受託案件等、一部には受注生産も行っておりますが、その多くが短期間で販売するものであることから、受注状況につきましては記載を省略しております。

(3) 販売実績

当連結会計年度における販売実績をセグメントごとに示すと、次のとおりであります。

セグメントの名称	金額（百万円）	前期比（％）
地図データベース関連事業	49,092	6.4
一般印刷関連事業	3,503	△4.0
報告セグメント計	52,596	5.6
その他	5,222	0.8
合計	57,819	5.2

(注) 1 セグメント間の取引については相殺消去しております。

2 主な相手先別の販売実績及び総販売実績に対する割合は、次のとおりであります。なお、当連結会計年度につきましては、当該割合が100分の10未満のため記載を省略しております。

相手先	前連結会計年度		当連結会計年度	
	金額（百万円）	割合（％）	金額（百万円）	割合（％）
株式会社N T T ドコモ	6,280	11.4	—	—

3 本表の金額には、消費税等は含まれておりません。

3【経営方針、経営環境及び対処すべき課題等】

文中の将来に関する事項は、当連結会計年度末現在においてゼンリングループが判断したものであります。

(1) 経営方針

当社は創業以来、地図業界のリーディングカンパニーとして地図関連情報の提供を通じて、社会に貢献し続けることを活動の基本として事業を拡大してまいりました。ゼンリングループは、「知・時空間情報の創造により人びとの生活に貢献します」を企業理念として掲げ、「Maps to the Future」のスローガンのもと、地図情報で未来を創造していくことを使命として企業運営を行っております。そして、情報化社会の発展により地図情報に求められる価値やニーズが大きく変化を続ける今、私たちは「より適した価値」を実現することで、「情報を地図化する世界一の企業」となることを目指してまいります。

その結果として、企業価値の向上を図り、ゼンリングループが株主の皆様にとって魅力ある企業集団であることを目指すとともに、お客様及び従業員を大切に、社会に貢献し続けていく企業集団でありたいと考えております。

(2) 目標とする経営指標

ゼンリングループは持続的な企業価値向上を目指し、資本効率及び財務健全性のバランスを考慮しつつも、収益基盤である地図データベース整備やビジネス開発に注力することで、営業利益率を高めることを優先課題として、自己資本当期純利益率（ROE）の改善に取り組んでまいります。

(3) 経営環境ならびに対処すべき課題

ゼンリングループは2015年度からスタートした中長期経営計画「ZENRIN GROWTH PLAN 2020（以下、ZGP2020）」（2016年3月期～2020年3月期）に取り組んでおります。

（ZGP2020の基本方針）

ゼンリングループは経営ビジョンである「情報を地図化する世界一の企業」を実現するために、ZGP2020では位置情報サービスの拡充、防災・減災に対する意識の高まり、安全運転支援など、多様化する地図情報の用途に対し、情報の差別化とコストリーダーシップを実現することで「日本の地図をすべてゼンリン基盤とする」ことを目指します。

（ZGP2020のテーマ）

「日本の地図をすべてゼンリン基盤へ」

（ZGP2020の基本構成）

ZGP2020ではニーズに対応したサービスの提供にとどまらず、地図情報の新たな利用価値創造を目指し、「モノ」から「コト」への転換を軸として、3つの基本構成を掲げて取り組んでおります。

- Ⅰ．「利用シーン」を創造した用途開発による収益拡大
- Ⅱ．「QCDDS」（※）を追求した時空間情報システムの安定運用
- Ⅲ．「生産性改革」の実現による固定費率の低減

（※）QCDDS：Quality（品質）、Cost（価格）、Delivery（納期）、Diversity（多様性）、Scalability（拡張性）

(4) 会社の支配に関する基本方針

① 基本方針の概要

当社取締役会は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者は、当社の企業価値の源泉を理解し、当社が企業価値及び株主共同の利益を継続的かつ持続的に確保、向上していくことを可能とする者である必要があると考えております。

また、当社取締役会は、株券等所有割合が3分の1以上となる当社株券等の買付行為（以下、かかる買付行為を「大規模買付行為」といい、大規模買付行為を行う者を「大規模買付者」といいます。）が、ゼンリングループの企業価値に重大な影響を及ぼす場合において、ゼンリングループの企業価値及び株主共同の利益を確保し、又は向上させるため、大規模買付行為に適切な対応を行う必要があると考えております。

ゼンリングループは、創業以来培った技術やノウハウを活かして、経営理念や中長期経営計画に基づきコンテンツの充実や新たな事業領域開発に取り組み、会社と事業の変革を通じて市場の変化に対応しながら企業価値向上に努めると同時に、ゼンリングループの地図関連情報は官公庁や公共的な企業においても活用されているという、高い公共性も自負しております。加えて、当社は地域社会への貢献も企業の重要な役割と考え、地域事業への出資やスポーツ・文化活動の支援等を通じてその役割に取り組んでおります。

当社の経営においては、前述のような事業環境や事業特性並びに顧客や従業員、取引先等のステークホルダーとの関係に対する理解が必要不可欠であり、また、十分な理解なくしては、ゼンリングループの企業価値を適正に把握することは困難であると考えます。

② 基本方針に照らして不適切な者が支配を獲得することを防止するための取り組み

当社取締役会は、ゼンリングroupの企業価値及び株主共同の利益を毀損する恐れのある大規模買付者は、当社の財務及び事業の方針の決定を支配する者として適切ではないと考えます。

このような不適切な大規模買付者に対しては、情報開示を積極的に求め、当社取締役会の判断、意見などとともに公表するなど、株主の皆様が適切な判断を行うための情報と時間の確保に努めるとともに、必要に応じて法令及び定款の許容する範囲内において適切な対応をまいります。

③ 具体的取り組みに対する当社取締役会の判断及びその理由

上記取り組みは、企業価値及び株主共同の利益を確保又は向上させる目的をもってなされるものであり、基本方針に沿うものです。

従いまして、これらの取り組みは基本方針に沿い、当社株主共同の利益に合致するものであり、当社の会社役員の地位の維持を目的とするものではありません。

4 【事業等のリスク】

当社グループの事業等のリスクとして、投資家の判断に重要な影響を及ぼす可能性のある事項には、以下のようなものがあります。当社グループは、これらのリスクの存在を認識した上で、その発生を未然に防ぎ、かつ、万一発生した場合でも適切に対処するよう努める所存であります。なお、文中には将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 国内外の経済情勢及び社会情勢の影響

① 景気変動について

当社グループは、日本を始め北米、欧州、アジアなどの各地域で事業を展開しており、それぞれの市場における景気動向や需要変動の影響を、直接あるいはカーメーカー関連各社などを通じて間接的に受けています。

従いまして、これらの主要市場において、景気の後退、需要構造の変化、価格競争の激化などが当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 海外市場の障壁について

当社グループは、カーナビゲーション・GIS・データ配信分野において、成熟市場である北米・欧州に加え、経済成長及び市場規模の拡大が見込まれるアジア地域で事業活動を展開しております。海外市場への進出においては、以下のようなリスクの検討も十分に行っておりますが、それぞれの地域における様々な政治的、経済的もしくは法的な障害により、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

また、各地域における取引先の事業戦略やスケジュールの変更などにより、計画通りの操業が実現できず、収益性を確保できない可能性もあります。

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1) 不利な政治的又は経済的な要因 | 6) 宗教及び文化の相違 |
| 2) 法律又は規制の変更 | 7) 国際通貨の変動 |
| 3) 資金調達及び本国送金に対する制約 | 8) 社会インフラ政策、消費動向の変動 |
| 4) 優秀な人材の採用と定着率の維持 | 9) 提携先との良好な取引関係の維持 |
| 5) テロ、戦争、伝染病、自然災害等 | |

③ アジア地域における制作作業について

当社グループは、製造コスト削減のために中国を始めとしたアジア地域において、地図データベース制作工程である情報入力処理、ソフトウェア及びコンテンツの開発・製造を行っております。しかし、これらの国において政治の変化又は法律や規制の変更、ストライキなど予想外の事態が発生した場合、業務遂行に支障が生じる可能性があります。

また、大規模な地震や洪水等の自然災害のほか、火災、停電等により操業停止を余儀なくされる可能性があります。これらの重大な障害が発生した場合には業務の遅延が発生し、当社グループが拡大を目指す地図データベース関連事業の展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

(2) 会社がとっている特異な経営方針に係るもの

① 人材の確保と育成について

当社グループの主力事業である地図データベース関連事業は、顧客仕様のデータベースのみならず、位置情報の拡充、防災・減災に対する意識の高まり、安全運転支援など、多様化する用途に対して高い技能を必要とするため、製品化にはレベルの高い技術開発要員や開発業務管理者などの人材が必要であります。

また、当社グループの地図データベースは国内全域での現地調査により情報を収集していますが、地図データベースに期待される更新頻度の短期間化や地図情報の正確性を確保するためには、全国各地で活動する多数の調査員を効率的に管理するとともに、生産部門に集約される変化情報を的確に把握し、製造工程で正しく反映させるための人材も必要であります。

従いまして、こうした人材を確保又は育成できなかった場合には、当社グループの将来の成長並びに経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 個人情報の管理について

当社グループは、顧客情報や従業員情報の他、住宅地図等の製品に掲載・収録される居住者名、住所等の個人情報を収集・管理しており、個人情報の適正な取り扱いをすることは、当社の事業活動の基本であり、社会的責務であると認識しております。

当社グループにおきましては、個人情報の取得・利用・保管・廃棄に関する規程・手順等の社内ルールの整備、従業員教育、入退室管理等の物理的対策及びコンピュータシステムへのアクセス管理等の情報セキュリティ対策を講じております。

しかし、万一、これらの個人情報が当社グループ又は業務委託先から漏洩した場合には、以後の事業活動が制限されたり、法令遵守に必要なコストが増加する可能性があります。さらに、損害賠償請求がなされたり、個人情報の管理が不十分であるとの非難を受けて社会的信用の低下をもたらし、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

(3) 財政状態及び経営成績の異常な変動

① 経営成績の季節的変動について

当社グループの主力事業である地図データベース関連事業は、季節による需要の変動が大きく、下半期に売上高が偏る傾向にあります。なお、直近3ヵ年の平均実績としましては、年間売上高に対する上半期と下半期の売上高の比率はそれぞれ43.7%と56.3%となっております。

② 退職給付債務の変動について

当社グループの従業員退職給付債務及び退職給付費用の計算は、割引率、将来の報酬水準、退職率などの仮定に基づいて算出されます。これらの仮定と実際の結果との差額は、即時に債務に認識され、原則として将来の会計期間にわたって費用化されます。退職給付債務及び退職給付費用の計算に使用した仮定は妥当なものと考えておりますが、実際との差異又は仮定自体の変更、特に、一層の割引率の低下や運用利回りの悪化は、退職給付に係る資産、退職給付に係る負債及び退職給付費用に影響を与えるため、当社グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

③ 固定資産の減損について

当社グループは、有形固定資産、ソフトウェア及びのれんなどの固定資産を保有しております。

これらの資産について、経営環境の変化等で、その収益性の低下により投資額の回収が見込めなくなった場合には、帳簿価額を減額し、当該減少額を減損損失として計上することとなるため、当社グループの財政状態及び経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

(4) 特定の取引先への依存について

① 特定の販売先への依存について

当社グループの売上高は、特定のカーメーカー関連各社及び通信事業者並びにインターネットサービス事業者に対するものが多くを占めております。

これらの販売先とは、取引関係が長く、製品の仕様検討、技術開発、地図データベースの改良などにおいて相互協力関係にあり、引き続き販売先を通じて顧客ニーズを充足する努力を続けることで、良好な協力関係の維持と発展を目指してまいります。

しかしながら、これらの販売先の事業方針や業績動向などの影響を受け、価格引き下げ要求、取引内容変更、契約打ち切りなどが生じた場合は、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。さらに、市場環境の変化に伴う最終消費者の潜在的な減少リスクを内包しております。

② 特定の供給元への依存について

当社グループは北米・欧州・アジア地域等の地図データをカーナビゲーション・GIS・データ配信分野に提供し、海外事業として展開しております。国内においては、その基となる地図データベースを自社で制作しておりますが、海外向けの基となる地図データベースについては、海外の特定の地図事業者に依存しております。地図事業者からの供給が停止された場合は、既存販売先への継続的な地図データの提供に支障が生じ、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

(5) 特定の製品、技術等への依存について

① 地図データベース派生製品への依存について

当社グループの売上の大部分は地図データベースを基に制作される製品群の売上に依存しております。当社は、地図データベースの一部を利用した製品（以下、「地図データベース派生製品」という）、或いは地図データベースそのものの販売による売上が拡大を続けると考えており、将来の成長は主に地図データベース関連事業に係わる技術開発や新規コンテンツの充実に依存すると考えております。

これら地図データベース派生製品の制作には特有の技術が必要であり、新規コンテンツを企画するためには独創性が要求されます。また、多様化する顧客ニーズへの対応を含め、今後の事業展開においては高度で複雑な経営を必要としております。

従いまして、次のようなリスクを内包しております。

- 1) 新サービスや新コンテンツ開発のための先行投資が確実に顧客ニーズを捉え、大きな成果をもたらすという保証はありません。
- 2) インターネットの普及とともに顧客ニーズが多様多様となり、顧客が求める製品やサービスを的確かつ迅速に提供できなければ、当社グループの事業展開にとって不利な状況となる可能性があります。
- 3) 新製品及び新技術の開発に努めておりますが、新製品や新技術が当社独自の知的財産権として法律上保護され、その優位性が長期にわたり確保される保証はありません。
- 4) 技術革新と顧客ニーズが急激に変化するため、新たに構築した生産方式が急速に陳腐化する可能性があります。
- 5) 地図データベース派生製品の分野に異業種からの参入が増え、顧客の選択肢が増えることで、競争が激化する可能性があります。

上記のリスクをはじめとして、当社グループが地図データベース関連事業の多様性に十分に対応できず、地図データベースを利用した新製品開発に遅れをとった場合には、将来の成長並びに経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 地図データベースの精度・鮮度維持のための情報収集コストの回収可能性について

当社グループの地図データベース関連製品には、最新の地図情報を求めるニーズが高まっており、市場のニーズに的確に応えることが当社グループの発展につながると考えております。そのため、地図データベースの更新には、每期継続して多額の情報収集コストを投入しておりますが、当該コストは売上高の増減にかかわらず固定的に製造原価の相当額を占め続けることとなります。

従いまして、顧客の支持を得られる製品を継続的に市場に投入出来なければ当該コストを回収しきれず、当社グループの経営成績に悪影響を及ぼす可能性があります。

③ 他社との業務提携について

当社グループは、地図データベース関連の製品開発や生産性向上のために、カーメーカー関連各社や異業種も含めた企業との業務提携によるパートナーシップ強化や取引深耕を図り、地図データベースの技術開発及び各種コンテンツの充実並びに新規業態への進出を目指しております。

しかしながら、事業戦略、取引条件、その他の理由により業務提携等が不成立或いは中断した場合、友好的な協力関係がもたらす成果を享受できず、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

④ 企業への投資について

当社グループは、新規事業への進出、既存事業拡大、経営効率向上のため、M&Aによる投資を行っております。

しかしながら、市場環境の変化や競争力の低下などにより、投資先企業が当初想定したとおりの事業展開ができない場合、当該会社の業績・財政状態の悪化、のれんの減損損失を計上する可能性があります。

また、これらの投資においては、予め対象会社の法務・財務リスクなどを調査・評価しておりますが、投資時点では顕在化していない内部統制上の問題や、法令に抵触する可能性もあります。

これらの問題が発生した場合、経営成績や事業展開に悪影響を及ぼすだけでなく、当社グループへの信頼や企業イメージが低下する可能性があります。

(6) 法的規制等について

① 知的財産権の侵害について

当社グループでは、独自に開発した製造技術や新規開発製品に関するもので知的財産の保護の対象となる可能性のあるものについて、必要に応じて特許権や商標権の出願、登録を行っておりますが、必ずしもこれらの権利を取得できるとは限りません。当社グループの技術、ノウハウ又は製品名等が特許権や商標権として保護されずに他社に先んじられた場合には、当社グループの製品開発或いは販売に支障が生じる可能性があります。

また、当社グループでは第三者の知的財産権を侵害しないよう十分な調査を行い、注意を払っておりますが、当社グループの調査範囲が十分でかつ完全であるとは保証できません。さらに、特許権等の知的財産権が当社グループの事業にどのように適用されるのか全てを正確に想定することは困難であり、万一、当社グループが第三者の知的財産権を侵害した場合には、当該第三者から損害賠償請求、使用差し止め等の訴えを起こされる可能性、並びに当該知的財産権に関する対価の支払いが発生する可能性があります。

従いまして、これらの場合には、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 独占禁止法違反について

当社グループは、独占禁止法の遵守を事業活動の基本方針としており、その実行のため、当社グループのCSR活動における主要項目として、従業員に対する独占禁止法遵守教育や内部監査などに努めております。

しかし、万一、独占禁止法違反が発生した場合には、法的制裁を受けるだけでなく、社会的信用の低下をもたらす、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

(7) その他

① 市場シェア変動の可能性について

当社グループは、平成4年にカーナビゲーション用データ「ゼンリン・ナビソフト」の販売を開始し、国内におけるカーナビゲーション用データの分野ではトップシェアを獲得できるまでに事業を成長させてまいりました。また、データ配信分野においても、当社の地図データベースは国内の多くのインターネット地図サービスに採用されており、今後もより一層の事業拡大が期待されております。

しかしながら、カーナビゲーション及びインターネットサービスにおいては、コンピュータ、通信、コンテンツなどの関連企業が参入しており、その中でも地図データベースにおいては、他の地図データベース制作会社、インターネットサービス事業者、通信事業者などが新規参入或いは勢力を拡大してくる可能性があり、それら各社の中には当社グループよりも企業規模が大きく、経営資源が豊富な企業も存在します。

今後、技術革新を契機として、他社が新しい地図データベースを市場投入しシェアを獲得した場合、或いは競合会社間の業務提携等が成立した場合には、当社グループが将来においても現在のシェアを維持できるという保証はなく、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

② 商品及び製品の欠陥の発生とそれに伴う回収リスクについて

当社グループの製品は、独自の情報収集及び外部から取得した各種情報、製造ノウハウ等の集大成であり、製品化においては高度の技術と情報処理能力を必要といたします。

当社グループでは、それらの製造において細心の注意を払うとともに、仕入商品を含め、欠陥のある商品及び製品を出荷しないように作業工程の各段階で厳重な品質検査を行っておりますが、そのことが、欠陥のある商品及び製品が市場に流通しないことを絶対的に保証するものではありません。

万一、当社グループが提供した商品及び製品に欠陥が発生した場合には、当該商品及び製品の回収に係るコストが発生するとともに、ご購入されたお客様への賠償問題が発生するなど、経営成績や事業展開に悪影響を及ぼすだけでなく、当社グループへの信頼や企業イメージが低下する可能性があります。

③ 情報技術への依存

当社グループは、製品の開発、生産、販売など様々な事業活動の中で、情報技術及びネットワークシステムを利用しています。

これらの情報技術の利用にあたっては、安全な運用のため対策が施されていますが、インフラ障害、サイバー攻撃、コンピューターウイルスへの感染等などによって、各種業務活動の停止、データの喪失、当社のサービスの機能低下などが発生する可能性があります。この場合、復旧費用の発生、当社製品の信用力やブランドイメージの毀損などにより、当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

④ 自然災害等によるリスクについて

自然災害、火災、流行病の蔓延等により、当社グループの営業拠点及び生産拠点に被害が発生した場合、事業活動に支障が生じる可能性があります。

当社では大規模地震等の自然災害発生に対する防災マニュアルを作成するなど、災害の発生に備えておりますが、これらによっても自然災害等による被害を完全に回避できるわけではなく、被害が発生した場合には当社グループの経営成績や事業展開に悪影響を及ぼす可能性があります。

なお、上記以外にも様々なリスクがあり、ここに記載されたものが当社グループの全てのリスクではありません。

5 【経営上の重要な契約等】

該当事項はありません。

6 【研究開発活動】

当社グループは、市場が求める正確で新鮮かつ充実した「知・時空間情報」を継続的に供給するために、事業の根幹である地図データベース制作システムの機能向上に努めております。

また、急速なICT社会の発展に伴う事業環境の変化に適応したサービスの提案や、ITSが目指す「安心」・「安全」・「快適」、さらに「エコ」な車社会の実現に寄与するため、データ配信技術や、高精度・高鮮度地図データベースなどをテーマに研究開発に取り組んでおります。

なお、研究開発活動は、当社の研究開発室、㈱ジオ技術研究所（連結子会社）及び㈱ゼンリンデータコム（連結子会社）を中心に推進しております。

当連結会計年度における当社グループの研究開発費合計額は462百万円であります。

主な研究開発活動は、次のとおりであります。

（地図データベース関連事業）

3D情報調査技術

測量用GPS、360度カメラ、高精度レーザー計測機器などを搭載した専用車両で収集したデータから、先進運転支援システムや近未来の自動運転車で使われる3D時空間情報を高精度・高鮮度かつ低コストで作成する技術の研究・開発を行っております。

一般印刷関連事業、その他に係る研究開発活動はありません。

7【財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析】

当連結会計年度の財政状態、経営成績及びキャッシュ・フローの状況の分析は、次のとおりであります。なお、文中には将来に関する事項が含まれておりますが、当該事項は当連結会計年度末現在において判断したものであります。

(1) 重要な会計方針及び見積り

当社グループの連結財務諸表は、わが国において一般に公正妥当と認められている会計基準に準拠して作成しております。この連結財務諸表の作成にあたり、貸倒引当金、退職給付に係る資産、退職給付に係る負債、繰延税金資産の回収可能性の検討等には、過去の実績や合理的な見積りを勘案した判断を必要としております。決算日における収益及び費用並びに資産及び負債等の計上額にはこれらの見積り、将来の予測が含まれておりますが、実際の結果は、将来の不確定な要因により異なる可能性があります。

当社グループの連結財務諸表で採用する重要な会計方針については、「第5. 1. (1)連結財務諸表 連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」に記載しております。

(2) 経営成績の分析

① 売上高

当連結会計年度の売上高は、国内カーナビゲーション用データや開発受託などITS関連の売上が増加したことなどにより57,819百万円（前年同期比2,849百万円増加、5.2%増）となりました。

② 売上原価

売上原価は33,699百万円（前年同期比607百万円増加、1.8%増）となりました。また、当連結会計年度における原価率は、前連結会計年度に比べ1.9ポイント低下し58.3%となりました。

③ 販売費及び一般管理費

販売費及び一般管理費は、人件費が増加したことなどにより19,885百万円（前年同期比1,046百万円増加、5.6%増）となりました。

④ 営業利益

営業利益は4,234百万円（前年同期比1,195百万円増加、39.4%増）となりました。また、当連結会計年度における営業利益率は、前連結会計年度に比べ1.8ポイント上昇し7.3%となりました。

⑤ 営業外収益及び営業外費用

営業外収益は、持分法による投資利益が減少したことなどにより347百万円（前年同期比98百万円減少、22.0%減）となりました。また、営業外費用は54百万円（前年同期比2百万円減少、4.1%減）となりました。

⑥ 経常利益

経常利益は4,527百万円（前年同期比1,100百万円増加、32.1%増）となりました。また、当連結会計年度における経常利益率は、前連結会計年度に比べ1.6ポイント上昇し7.8%となり、総資産経常利益率（ROA）も1.5ポイント上昇し7.2%となりました。

⑦ 特別利益及び特別損失

特別利益は14百万円（前年同期比40百万円減少、73.8%減）となりました。また、特別損失は、固定資産除売却損及び減損損失が減少したことなどにより315百万円（前年同期比124百万円減少、28.4%減）となりました。

⑧ 税金等調整前当期純利益

税金等調整前当期純利益は4,226百万円（前年同期比1,184百万円増加、38.9%増）となりました。

⑨ 法人税等

法人税等（法人税、住民税及び事業税と法人税等調整額の合計額）は1,691百万円（前年同期比265百万円増加、18.7%増）となりました。また、当連結会計年度における法人税等の負担率（税金等調整前当期純利益に対する法人税等の割合）は40.0%となり、法定実効税率30.6%に比べ9.4ポイント高くなりました。これは主に交際費等永久に損金に算入されない項目及び住民税均等割などの影響によるものであります。

⑩ 非支配株主に帰属する当期純利益

非支配株主に帰属する当期純利益は、外部株主が存在する連結子会社の当期純利益の増減などの影響により73百万円（前年同期比66百万円増加）となりました。

⑪ 親会社株主に帰属する当期純利益

親会社株主に帰属する当期純利益は2,462百万円（前年同期比851百万円増加、52.9%増）となりました。その結果、当連結会計年度における自己資本利益率（ROE）は、前連結会計年度に比べ2.0ポイント上昇し6.0%となり、1株当たり当期純利益も22.90円増加し67.11円となりました。

(3) 財政状態についての分析

① 総資産

総資産は、Abalta Technologies, Inc.の株式取得に伴い、同社及びその子会社であるAbalta Technologies EOODを連結の範囲に含めたことなどにより、のれんが689百万円増加したことに加え、現金及び預金が1,718百万円、受取手形及び売掛金が1,669百万円、退職給付に係る資産が909百万円それぞれ増加いたしました。これらの要因により、総資産は65,150百万円（前連結会計年度末比5,339百万円増加、8.9%増）となりました。

② 負債

負債は、前受金が1,221百万円、未払費用が887百万円、未払法人税等が945百万円それぞれ増加いたしました。これらの要因により、負債は21,686百万円（前連結会計年度末比3,372百万円増加、18.4%増）となりました。

③ 純資産

純資産は剰余金の配当により1,249百万円減少した一方、親会社株主に帰属する当期純利益2,462百万円を計上したことにより、利益剰余金が1,213百万円増加いたしました。そのほか、「役員株式給付信託（BBT）」及び「従業員株式給付信託（J-E SOP）」の設定などに伴い資本剰余金が177百万円、自己株式が178百万円それぞれ増加いたしました。これらの要因により、純資産は43,463百万円（前連結会計年度末比1,967百万円増加、4.7%増）となりました。

以上の結果、当連結会計年度末における自己資本比率は、前連結会計年度末に比べ2.5ポイント低下し64.6%、1株当たり純資産額は1,094.22円から52.29円増加し1,146.51円となりました。

(4) 資本の財源、資金の流動性

① キャッシュ・フロー

当連結会計年度において、営業活動により得られた現金及び現金同等物（以下、「資金」という）は9,318百万円となり、投資活動に5,313百万円支出した結果、純現金収支（フリー・キャッシュ・フロー）は4,004百万円の収入となりました。この資金を、配当金の支払いに1,248百万円、リース債務の返済に1,058百万円などに支出した結果、財務活動によるキャッシュ・フローとして支出した資金は2,248百万円となりました。

以上の結果、当連結会計年度末における資金残高は、前連結会計年度末に比べ1,718百万円増加し6,817百万円となりました。

② 資金需要

当社グループの資金需要は、運転資金としては、各種地図データベースの構築のための調査業務費用などがあり、設備投資資金としては、主に各種データベース制作システムやソフトウェアプログラムなどへの投資があります。当連結会計年度につきましては5,563百万円の設備投資を行っております。

③ 財務政策

当社グループは、現在及び将来の事業活動のために適切な水準の流動性維持及び、効率的な資金の確保を最優先としております。これに従い、営業活動によるキャッシュ・フローの確保に努めると共に、自己資金を効率的に活用しております。

資金が不足する場合、短期的な運転資金の調達に関しましては、複数の金融機関より確保している融資枠からの短期借入を基本とし、設備及びM&Aを中心とした投資資金の調達に関しましては、ファイナンス・リースの活用や金利変動リスクを考慮した固定金利の長期借入金を基本としております。なお、余剰資金が生じた場合は、借入金の返済に充当しております。

以上により、当社グループの今後の事業活動において必要な運転資金及び設備投資資金を確保することは可能と考えております。

(5) 経営成績に重要な影響を与える要因

「第2. 4. 事業等のリスク」に記載のとおりであります。

(6) 経営者の問題認識と今後の方針

「第2. 3. 経営方針、経営環境及び対処すべき課題等」に記載のとおりであります。

第3【設備の状況】

1【設備投資等の概要】

当社グループは、企業価値の持続的な向上を目指して、以下の点に重点を置いた設備投資を行っております。

- ・事業基盤である地図データベースの開発と整備
- ・様々な製品やサービスを提供するためのシステムの構築
- ・合理化や生産性の向上

当連結会計年度は、無形固定資産への投資額を含めて全体で5,563百万円の設備投資を実施いたしました。

各セグメントにおける設備投資の内訳は、次のとおりであります。

(地図データベース関連事業)

地図の制作工程の合理化を図り、地図データベースの精度及び鮮度の向上のため、施設及び機器の増設に加え、各種データベース制作システムやソフトウェアプログラムへの開発投資などに4,837百万円の設備投資を実施いたしました。

(一般印刷関連事業)

一般印刷の生産性の向上のため、機械の更新などに685百万円の設備投資を実施いたしました。

(その他)

仕入商品の販売などの事業活動のため、23百万円の設備投資を実施いたしました。

2 【主要な設備の状況】

当社グループにおける主要な設備は、次のとおりであります。

(1) 提出会社

平成29年 3月31日現在

事業所名 (所在地)	設備の内容 (セグメントの名称)	設備の種類別の帳簿価額（百万円）								従業員数 (人) 外〔正社員以外の 雇用者〕
		土地		建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	ソフト ウェア	リース 資産	その他	合計	
		面積（㎡）	金額							
サーベイ本部、DB制作本部、商品制作本部、開発本部他 (北九州市戸畑区他)	出版・編集設備 地図データベース 製造・研究開発設備 (地図データベース関連事業)	11, 517	902	(55) 2, 037	(2) 8	7, 447	365	130	(57) 10, 890	639 〔67〕
事業企画本部、第一事業本部、第二事業本部他 (東京都千代田区他)	住宅地図帳・地図データベース販売設備 (地図データベース関連事業)	2, 827	2, 611	(913) 568	(177) 6	224	37	109	(1, 090) 3, 557	1, 124 〔540〕
総務・人事本部、コーポレート本部他 (北九州市戸畑区他)	その他設備 (全社共通)	1, 737	406	(686) 〔214〕 1, 106	(7) 7	192	26	196	(694) 〔214〕 1, 936	178 〔9〕
合計		16, 082	3, 919	(1, 654) 〔214〕 3, 711	(187) 22	7, 864	429	436	(1, 842) 〔214〕 16, 384	1, 941 〔616〕

(2) 国内子会社

平成29年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	設備の内容 (セグメントの名称)	設備の種類別の帳簿価額（百万円）								従業員数 (人) 外〔正社員以外の 雇用者〕
			土地		建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	ソフト ウェア	リース 資産	その他	合計	
			面積 (㎡)	金額							
(株)ゼンリン プリンテッ クス	本社 (北九州市 門司区)	総合印刷・出版 設備 (地図データベ ース関連事業・ 一般印刷関連 事業)	28,601	2,482	(19) 720	(15) 106	3	1,344	22	(34) 4,679	270 [45]
(株)ダイケイ	本社 (大阪市 西区)	地図データベース 製造設備 (地図データベ ース関連事業)	2,235	256	157	(0) －	－	1	1	(0) 416	8
(株)ジオ技術 研究所	本社 (福岡市 博多区)	地図データベース 製造設備 (地図データベ ース関連事業)	－	－	(47) 7	(0) －	162	29	27	(48) 227	67 [3]
(株)ゼンリン インターマ ップ	本社 (那覇市)	地図データベース 製造・販売設備 (地図データベ ース関連事業)	919	85	139	(0) 2	1	11	10	(0) 251	47 [141]
(株)ゼンリン プラスワン	本社 (東京都 千代田区)	地図データベース 製造設備 (地図データベ ース関連事業)	－	－	－	(0) －	0	－	0	(0) 0	13 [5]
(株)ゼンリン bizネクサ ス	本社 (東京都 千代田区)	ダイレクトメール 発送代行等企画・ 編集設備 (その他)	－	－	(17) 0	(2) －	14	－	3	(19) 19	35
(株)ゼンリン ジオインテ リジェンス	本社 (東京都 千代田区)	地図データベース 製造・販売設備 (地図データベ ース関連事業)	－	－	(7) 1	－	12	7	0	(7) 21	18 [1]
(株)ゼンリン データコム	本社 (東京都 港区)	地図データベース 等配信設備 (地図データベ ース関連事業・ その他)	－	－	(270) 59	(1) －	3,736	625	20	(271) 4,441	281 [7]
(株)Will Smart	本社 (東京都 中央区)	デジタルサイネー ジ企画・開発・運 営・販売設備 (その他)	－	－	(3) －	－	22	3	3	(3) 29	9
合計			31,757	2,823	(365) 1,086	(19) 108	3,954	2,023	91	(385) 10,089	748 [202]

(3) 在外子会社

平成29年3月31日現在

会社名	事業所名 (所在地)	設備の内容 (セグメントの名称)	設備の種類別の帳簿価額 (百万円)						従業員数 (人) 外 [正社員以外の 雇用者]
			建物及び 構築物	機械装置 及び 運搬具	ソフト ウェア	リース 資産	その他	合計	
ZENRIN USA, INC.	本社 (アメリカ バーリンゲーム 市)	地図データベース 製造・販売設備 (地図データベース関 連事業)	(19) 0	(2) —	1	—	10	(21) 12	14
ZENRIN EUROPE GmbH	本社 (ドイツ デュッセルドルフ 市)	地図データベース 製造・販売設備 (地図データベース関 連事業)	(5) —	(0) 0	—	—	1	(6) 1	8 [1]
Abalta Technologies, Inc.	本社 (アメリカ トーランス市)	地図データベース 製造・販売設備 (地図データベース関 連事業)	(14) 3	—	3	—	26	(14) 33	41 [4]
上海大計数据处理 公司	本社 (中国 上海市)	地図データベース 製造設備 (地図データベース関 連事業)	(3) 27	2	1	—	28	(3) 59	194 [6]
Abalta Technologies EOOD	本社 (ブルガリア ソフィア市)	地図データベース 製造設備 (地図データベース関 連事業)	(1) —	—	—	—	1	(1) 1	14
合計			(45) 31	(3) 2	6	—	67	(48) 107	271 [11]

(注) 1 「その他」は工具、器具及び備品並びに建設仮勘定であります。

2 「建物及び構築物」欄の () 書は、賃借中の事務所・倉庫・集合寮・社宅に係る年間賃借料を表示しております。

3 「建物及び構築物」欄の [] 書は、賃貸中の事務所（ゼンリン金沢ビル等）に係る帳簿価額を外数で記載しております。

4 「機械装置及び運搬具」欄の () 書は、リース設備の車両等に係る年間リース料を表示しております。

3 【設備の新設、除却等の計画】

当社グループの設備投資額については、生産能力の強化・合理化あるいは投資効率などを総合的に勘案して計画しております。

当連結会計年度後1年間において計画している重要な設備の新設等に係る投資予算額は5,480百万円であり、その所要資金につきましては、自己資金及び借入金を充当する予定であります。

重要な設備の新設、除却等の計画は、次のとおりであります。

(1) 重要な設備の新設等

会社名	事業所名 (所在地)	事業の種類別 セグメントの名称	設備の内容	投資予定額(百万円)		摘要
				総額	既支払額	
提出 会社	開発本部 (北九州市戸畑区)	地図データベース 関連事業	時空間データベース制作システム	1,202	—	地図データベース制作に係るソフトウェア開発
		地図データベース 関連事業	時空間データフォーマット制作システム	562	—	地図データフォーマット制作に係るソフトウェア開発
(株)ゼンリン データコム	本社 (東京都港区)	地図データベース 関連事業	ナビゲーションソフトウェアに関連するアプリケーション	471	—	スマートフォン及びカーナビゲーションシステム用アプリケーション開発
		地図データベース 関連事業	地図配信基盤ソフトウェア及びハードウェア	645	—	地図配信サービスに係る基盤強化

(2) 重要な設備の除売却等

該当事項はありません。

第4【提出会社の状況】

1【株式等の状況】

(1)【株式の総数等】

①【株式の総数】

種類	発行可能株式総数（株）
普通株式	134,000,000
第1種優先株式	67,000,000
計	134,000,000

(注) 当社の発行可能種類株式総数は、それぞれ普通株式134,000,000株、第1種優先株式67,000,000株であり、合計では201,000,000株となりますが、発行可能株式総数は134,000,000株とする旨定款に規定しております。なお、発行可能種類株式総数の合計と発行可能株式総数との一致については、会社法上要求されておられません。

②【発行済株式】

種類	事業年度末現在発行数(株) (平成29年3月31日)	提出日現在発行数(株) (平成29年6月19日)	上場金融商品取引所名 又は登録認可金融商品 取引業協会名	内容
普通株式	38,200,910	38,200,910	東京証券取引所 市場第一部 福岡証券取引所	単元株式数は100株 であります。
計	38,200,910	38,200,910	—	—

(注) 当社定款に第1種優先株式を発行することができる旨規定しておりますが、この有価証券報告書提出日現在、発行した第1種優先株式はありません。

なお、当社定款に規定している第1種優先株式の内容は、次のとおりであります。

1 第1種優先配当等（第11条の2）

- (1) 当会社は、普通株式を有する株主（以下「普通株主」という。）又は普通株式の登録株式質権者（以下「普通登録株式質権者」という。）に対して剰余金の配当を行うときは、当該配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載又は記録された第1種優先株式の株主（以下「第1種優先株主」という。）又は第1種優先株式の登録株式質権者（以下「第1種優先登録株式質権者」という。）に対し、当該配当に先立ち、第1種優先株式1株につき、当該配当において普通株式1株に対して交付する金銭の額又は金銭以外の財産の価額に、第1種優先株式の発行に先立って取締役会の決議で定める一定率（100パーセントを下限とし、125パーセントを上限とする。）を乗じた額又は価額（小数部分が生じる場合、当該小数部分については、第1種優先株式の発行に先立って取締役会が定める額とする。）の剰余金の配当（以下「第1種優先配当」という。）を行う。ただし、第1種優先配当の計算の結果、算出された額又は価額が当社定款第11条の2第2項に定める第1種無配時優先配当の額に満たない場合、第1種無配時優先配当をもって第1種優先配当とする。
- (2) 当会社は、毎事業年度の末日、毎年9月30日その他の取締役会が定める日の最終の株主名簿に記載又は記録された普通株主又は普通登録株式質権者に対して剰余金の配当を行わないときは、当該株主名簿に記載又は記録された第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者に対し、第1種優先株式1株につき、第1種優先株式の発行に先立って取締役会の決議で定める額の剰余金の配当（以下「第1種無配時優先配当」という。）を行う。
- (3) 第1種優先配当又は第1種無配時優先配当の全部又は一部が行われなかったときは、当会社は、その不足額を累積し、当社定款第11条の2第1項又は第2項に規定するときにおいて、当該配当に係る基準日の最終の株主名簿に記載又は記録された第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者に対し、第1種優先配当又は第1種無配時優先配当に先立ち、累積した不足額の剰余金の配当（以下「第1種累積未払配当」という。）を行う。
- (4) 当会社は、第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者に対し、第1種優先配当、第1種無配時優先配当及び第1種累積未払配当以外の剰余金の配当を行わない。

2 第1種優先株主に対する残余財産の分配（第11条の3）

- (1) 当会社の残余財産を分配するときは、第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者に対して、普通株主又は普通登録株式質権者に先立って、当社定款第11条の2第3項に規定する不足額を支払う。
- (2) 当会社は、当社定款第11条の3第1項に規定する場合には、第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者に対して、当社定款第11条の3第1項の規定による支払いのほか、普通株主又は普通登録株式質権者に対して交付する残余財産の価額に相当する金銭を支払う。

3 議決権 (第11条の4)

第1種優先株主は、全部の事項につき株主総会において議決権を行使することができない。ただし、過去2年間において、法令及び本定款に従って第1種優先配当又は第1種無配時優先配当を行う旨の決議が行われなかったときは、第1種優先配当又は第1種無配時優先配当の支払いが行われるまでの間は、この限りでない。

4 種類株主総会 (第11条の5)

- (1) 当会社が、会社法第322条第1項各号に掲げる行為をする場合においては、法令に別段の定めある場合を除くほか、第1種優先株主を構成員とする種類株主総会の決議を要しない。
- (2) 当社定款第13条の規定は、定時株主総会において決議する事項が、当該決議のほか、種類株主総会の決議を必要とする場合における当該種類株主総会に準用する。
- (3) 当社定款第14条、第15条、第17条及び第18条の規定は、種類株主総会にこれを準用する。
- (4) 当社定款第16条第2項の規定は、会社法第324条第2項の規定による種類株主総会の決議にこれを準用する。

5 普通株式を対価とする取得条項 (第11条の6)

- (1) 当会社は、次の各号のいずれかに該当する場合、当該各号に定める日（取締役会が、それ以前の日を定めたときは、その日）の到来をもって、その日に残存する第1種優先株式の全部を取得し、当会社はこれと引換えに、第1種優先株式1株につき当会社の普通株式1株を第1種優先株主に交付する。
 - ① 当会社が消滅会社となる合併、完全子会社となる株式交換又は株式移転（当会社の単独による株式移転を除く。）に係る議案が全ての当事会社の株主総会（株主総会の決議を要しない場合は取締役会）で承認された場合
当該合併、株式交換又は株式移転の効力発生日の前日
 - ② 当会社が発行する株式を対象とする公開買付けが実施された結果、公開買付者の株券等所有割合が50パーセント超となった場合
当該株券等所有割合が記載された公開買付報告書が提出された日から90日目の日
なお、本号において「公開買付け」とは金融商品取引法第27条の3第1項に定める公開買付けを、「株券等所有割合」とは金融商品取引法第27条の2第1項第1号に定める株券等所有割合を、「公開買付者」又は「公開買付報告書」とは金融商品取引法第2章の2第1節に定める公開買付者又は公開買付報告書をいう。
- (2) 当会社は、第1種優先株式を上場している金融商品取引所が、当会社の第1種優先株式を上場廃止とする旨の発表をした場合には、取締役会が定める日の到来をもって、その日に残存する第1種優先株式の全部を取得し、当会社はこれと引換えに、第1種優先株式1株につき当会社の普通株式1株を第1種優先株主に交付する。

6 株式の分割、株式の併合等 (第11条の7)

- (1) 当会社は、株式の併合をするときは、普通株式及び第1種優先株式ごとに同時に同一割合とする。
- (2) 当会社は、株式の分割又は株式無償割当てをするときは、以下のいずれかの方法によりする。
 - ① 普通株式及び第1種優先株式の双方について、株式の分割を、同時に同一の割合とする。
 - ② 普通株式又は第1種優先株式のいずれかについて株式の分割をし、株式の分割をしない種類の株式を有する株主又は登録株式質権者には株式の分割をする種類の株式を株式の分割と同時に同一の割合で割当てる株式無償割当てをする。
 - ③ 普通株主又は普通登録株式質権者には普通株式の株式無償割当てを、第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者には第1種優先株式の株式無償割当てを、それぞれ同時に同一の割合とする。
- (3) 当会社は、当会社の株主に募集株式の割当てを受ける権利を与えるときは、普通株主には普通株式の割当てを受ける権利を、第1種優先株主には第1種優先株式の割当てを受ける権利を、それぞれ同時に同一の割合で与える。
- (4) 当会社は、当会社の株主に募集新株予約権の割当てを受ける権利を与えるときは、普通株主には普通株式を目的とする新株予約権の割当てを受ける権利を、第1種優先株主には第1種優先株式を目的とする新株予約権の割当てを受ける権利を、それぞれ同時に同一の割合で与える。
- (5) 当会社は、新株予約権無償割当てをするときは、普通株主又は普通登録株式質権者には普通株式を目的とする新株予約権の新株予約権無償割当てを、第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者には第1種優先株式を目的とする新株予約権の新株予約権無償割当てを、それぞれ同時に同一の割合とする。
- (6) 当会社は、株式移転をするとき（他の株式会社と共同して株式移転をする場合を除く。）は、普通株主又は普通登録株式質権者には普通株式に代えて株式移転設立完全親会社の発行する普通株式と同種の株式を、第1種優先株主又は第1種優先登録株式質権者には第1種優先株式に代えて株式移転設立完全親会社の発行する第1種優先株式と同種の株式を、それぞれ同一の割合で交付する。
- (7) 当会社は、単元株式数について定款の変更をするときは、普通株式及び第1種優先株式のそれぞれの単元株式数について同時に同一の割合とする。
- (8) 当社定款第11条の7の規定は、現に第1種優先株式を発行している場合に限り適用される。

7 その他の事項 (第11条の8)

当会社は、当社定款第11条の2乃至7に定めるほか、第1種優先株式に関する事項について、これを第1種優先株式の発行に先立って取締役会の決議で定める。

(2) 【新株予約権等の状況】
該当事項はありません。

(3) 【行使価額修正条項付新株予約権付社債券等の行使状況等】
該当事項はありません。

(4) 【ライツプランの内容】
該当事項はありません。

(5) 【発行済株式総数、資本金等の推移】

年月日	発行済株式 総数増減数 (千株)	発行済株式 総数残高 (千株)	資本金増減額 (百万円)	資本金残高 (百万円)	資本準備金 増減額 (百万円)	資本準備金 残高 (百万円)
平成17年12月20日	—	38,200	—	6,557	44	13,111

(注) (株)エム・アール・シーを完全子会社とする株式交換による増加であります。
なお、(株)エム・アール・シーは平成26年8月11日付で清算終了しております。

(6) 【所有者別状況】

平成29年3月31日現在

区分	株式の状況（１単元の株式数100株）								単元未満 株式の状況 （株）
	政府及び地 方公共団体	金融機関	金融商品 取引業者	その他の 法人	外国法人等		個人その他	計	
					個人以外	個人			
株主数（人）	－	44	46	142	148	9	11,990	12,379	－
所有株式数 （単元）	－	118,752	4,117	96,128	42,399	19	119,664	381,079	93,010
所有株式数の 割合（％）	－	31.16	1.08	25.23	11.13	0.00	31.40	100.00	－

(注) 1 自己株式1,264,437株は、「個人その他」に12,644単元、「単元未満株式の状況」に37株含まれております。

2 証券保管振替機構名義の株式が「その他の法人」に53単元、「単元未満株式の状況」に37株含まれております。

3 「金融機関」に、「役員株式給付信託 (BBT)」及び「従業員株式給付信託 (J-E S O P)」の信託財産として、資産管理サービス信託銀行株式会社 (信託E口) が保有する株式2,500単元が含まれております。なお、当該株式については、連結財務諸表及び財務諸表において自己株式として表示しております。

(7) 【大株主の状況】

平成29年3月31日現在

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合 (%)
有限会社サンワ	北九州市小倉北区下到津1丁目6番36号	3,514	9.19
トヨタ自動車株式会社	愛知県豊田市トヨタ町1番地	2,848	7.45
株式会社西日本シティ銀行	福岡市博多区博多駅前3丁目1番1号	1,800	4.71
ゼンリン従業員持株会	北九州市小倉北区室町1丁目1番1号	1,762	4.61
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口9)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,697	4.44
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	東京都中央区晴海1丁目8番11号	1,266	3.31
大迫ホールディングス株式会社	福岡市博多区博多駅東3丁目1番29号	1,263	3.30
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	東京都港区浜松町2丁目11番3号	1,073	2.80
大迫 キミ子	北九州市小倉北区	900	2.35
株式会社福岡銀行	福岡市中央区天神2丁目13番1号	694	1.81
計	—	16,819	44.02

(注) 1 上記のほか、自己株式が1,264千株あります。

2 キャピタル・インターナショナル・リミテッド及びその共同保有者であるキャピタル・インターナショナル・インク、キャピタル・インターナショナル・エス・エイ・アール・エル、並びにキャピタル・インターナショナル株式会社から平成28年12月7日付で提出された大量保有報告書の変更報告書により、平成28年11月30日現在で以下の株式を所有している旨の報告を受けておりますが、当社として当事業年度末日現在における実質所有株式数の確認ができませんので、上記の大株主の状況には含めておりません。

なお、大量保有報告書の変更報告書の写しの内容は、次のとおりであります。

氏名又は名称	住所	所有株式数 (千株)	発行済株式総数に 対する所有株式数 の割合 (%)
キャピタル・インターナショナル・リミテッド	40 Grosvenor Place, London SW1X 7GG, England	418	1.10
キャピタル・インターナショナル・インク	11100 Santa Monica Boulevard, 15th Fl., Los Angeles, CA 90025, U.S.A.	254	0.67
キャピタル・インターナショナル・エス・エイ・アール・エル	3 Place des Bergues, 1201 Geneva, Switzerland	197	0.52
キャピタル・インターナショナル株式会社	東京都千代田区丸の内二丁目1番1号 明治安田生命ビル14階	1,694	4.44
計	—	2,565	6.72

(8) 【議決権の状況】

① 【発行済株式】

平成29年3月31日現在

区分	株式数 (株)	議決権の数 (個)	内容
無議決権株式	—	—	—
議決権制限株式 (自己株式等)	—	—	—
議決権制限株式 (その他)	—	—	—
完全議決権株式 (自己株式等)	(自己保有株式) 普通株式 1,264,400	—	—
完全議決権株式 (その他)	普通株式 36,843,500	368,435	—
単元未満株式	普通株式 93,010	—	1 単元 (100株) 未満 の株式
発行済株式総数	38,200,910	—	—
総株主の議決権	—	368,435	—

(注) 「完全議決権株式 (その他)」欄には証券保管振替機構名義の株式が5,300株 (議決権の数53個)、「役員株式
給付信託 (BBT)」及び「従業員株式給付信託 (J-E S O P)」の信託財産として資産管理サービス信託
銀行株式会社 (信託E口) が保有する株式250,000株 (議決権の数2,500個) が含まれております。

② 【自己株式等】

平成29年3月31日現在

所有者の氏名又は名称	所有者の住所	自己名義所有 株式数 (株)	他人名義所有 株式数 (株)	所有株式数の 合計 (株)	発行済株式総 数に対する所 有株式数の割 合 (%)
(自己保有株式) 株式会社ゼンリン	北九州市小倉北区室町 1 丁目 1 番 1 号	1,264,400	—	1,264,400	3.30
計	—	1,264,400	—	1,264,400	3.30

(注) 「役員株式給付信託 (BBT)」及び「従業員株式給付信託 (J-E S O P)」の信託財産として資産管理サ
ービス信託銀行株式会社 (信託E口) が保有する株式250,000株については、上記の自己株式等に含まれており
ません。

(9) 【ストックオプション制度の内容】

該当事項はありません。

(10) 【従業員株式所有制度の内容】

① 役員株式給付信託（ＢＢＴ）

1) 役員株式給付信託の概要

当社は、取締役の報酬と当社の中長期業績及び株式価値との連動性をより明確にし、監査等委員である取締役以外の取締役（業務執行取締役であるもの）が中長期的な業績の向上と企業価値の拡大に貢献する意識を高めること、監査等委員である取締役以外の取締役（業務執行取締役以外の取締役であるもの）及び監査等委員である取締役が、監査又は監督を通じた企業価値の拡大に貢献することを目的として、平成28年6月17日開催の第56回定時株主総会決議に基づき、平成28年9月8日より当社取締役に対する「役員株式給付信託（ＢＢＴ）」を導入しております。

当該制度は、当社が定める役員株式給付規程に基づき、一定の要件を満たした当社の取締役に対してポイントを付与し、退任時に、当該付与ポイントに相当する当社株式を給付する仕組みです。取締役に対して給付する株式については、予め信託設定した金銭により将来分も含め取得し、信託財産として分別管理するものといたします。

2) 役員に給付する予定の株式の総数又は総額

有価証券報告書提出日現在で、当社は181百万円を拠出し、株式給付信託口が当社株式を100,000株取得しております。

3) 当該役員株式所有制度による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

役員株式給付規程に基づき株式給付を受ける権利を取得した当社の取締役

② 従業員株式給付信託（Ｊ－ＥＳＯＰ）

1) 従業員株式給付信託の概要

当社は、当社の株価や業績と従業員の処遇の連動性をより高め、経済的な効果を株主の皆様と共有することにより、株価及び業績向上への従業員の意欲や士気を高めることを目的として、平成29年2月21日開催の取締役会決議に基づき、平成29年3月9日より当社従業員に対する「従業員株式給付信託（Ｊ－ＥＳＯＰ）」を導入しております。

当該制度は、当社が定める株式給付規程に基づき、一定の要件を満たした当社の従業員に対して当社株式を給付する仕組みです。従業員に対して給付する株式については、予め信託設定した金銭により将来分も含め取得し、信託財産として分別管理するものといたします。

2) 従業員に給付する予定の株式の総数又は総額

有価証券報告書提出日現在で、当社は329百万円を拠出し、株式給付信託口が当社株式を150,000株取得しております。

3) 当該従業員株式所有制度による受益権その他の権利を受けることができる者の範囲

株式給付規程に基づき株式給付を受ける権利を取得した当社の従業員

2 【自己株式の取得等の状況】

【株式の種類等】 会社法第155条第7号に該当する普通株式の取得

(1) 【株主総会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(2) 【取締役会決議による取得の状況】

該当事項はありません。

(3) 【株主総会決議又は取締役会決議に基づかないものの内容】

区分	株式数 (株)	価額の総額 (円)
当事業年度における取得自己株式	610	1,276,371
当期間における取得自己株式	93	199,237

(注) 当期間における取得自己株式には、平成29年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取りによる株式は含まれておりません。

(4) 【取得自己株式の処理状況及び保有状況】

区分	当事業年度		当期間	
	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)	株式数 (株)	処分価額の総額 (円)
引き受ける者の募集を行った取得自己株式 (注1)	250,000	332,575,500	—	—
消却の処分を行った取得自己株式	—	—	—	—
合併、株式交換、会社分割に係る移転を行った取得自己株式	—	—	—	—
その他 (単元未満株式の売渡請求による売渡し)	29	38,580	—	—
保有自己株式数 (注2)	1,264,437	—	1,264,530	—

(注) 1 当事業年度における「引き受ける者の募集を行った取得自己株式」は、「役員株式給付信託 (BBT)」及び「従業員株式給付信託 (J-E S O P)」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社 (信託E口) に対して実施した第三者割当であります。

2 当事業年度における「保有自己株式数」には、資産管理サービス信託銀行株式会社 (信託E口) が保有する250,000株は含めておりません。なお、資産管理サービス信託銀行株式会社 (信託E口) が保有する株式は、連結財務諸表及び財務諸表において自己株式として表示しております。

3 当期間における取得自己株式の処理状況及び保有状況には、平成29年6月1日からこの有価証券報告書提出日までの単元未満株式の買取り及び売渡しによる株式は含まれておりません。

3 【配当政策】

当社は、株主の皆様に対する利益還元を最重要課題と位置付け、持続的な企業価値の向上に取り組むとともに、連結ベースでの中長期経営計画における利益成長に基づいた、安定的かつ継続的な配当の実施を基本方針とし、配当金は現状レベルを維持しつつ、連結株主資本配当率（DOE）*注3％以上を目標といたします。

また、機動的な資本政策や資本効率の向上を目的とした自己株式の取得等も引き続き検討し、適正な内部留保を考慮しつつ連結ベースの利益水準に応じた利益還元を行ってまいります。

内部留保につきましては、市場の急速な動きに対応するために、今後の事業展開に不可欠な設備投資や研究開発投資等に充当してまいります。

配当の回数につきましては、中間配当と期末配当の年2回としており、配当の決定機関は、中間配当は取締役会、期末配当は株主総会であります。

当事業年度における剰余金の配当は、次のとおりであります。

決議年月日	配当金の総額 (百万円)	1株当たり配当額 (円)
平成28年10月28日 取締役会決議	625	17.0
平成29年6月16日 定時株主総会決議	646	17.5

当社は、「剰余金の配当等会社法第459条第1項各号に定める事項については、法令に別段の定めがある場合を除き、取締役会の決議により定めることができる。」旨を定款に定めておりますが、当事業年度における期末配当につきましては、定時株主総会決議に基づき実施しております。

なお、次期の年間配当金につきましては、1株当たり35円とし、中間配当金、期末配当金はともに1株当たり17円50銭とする予定であります。

*注 連結株主資本配当率（DOE）＝配当総額÷株主資本

株主資本は資本金、資本剰余金、利益剰余金の合計から自己株式の額を控除したものであります。

4 【株価の推移】

(1) 【最近5年間の事業年度別最高・最低株価】

回次	第53期	第54期	第55期	第56期	第57期
決算年月	平成25年 3 月	平成26年 3 月	平成27年 3 月	平成28年 3 月	平成29年 3 月
最高 (円)	1, 324	1, 300	1, 593	2, 590	2, 816
最低 (円)	693	902	1, 001	1, 353	1, 598

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものです。

(2) 【最近6月間の月別最高・最低株価】

月別	平成28年10月	11月	12月	平成29年 1 月	2 月	3 月
最高 (円)	1, 887	1, 819	2, 180	2, 619	2, 323	2, 443
最低 (円)	1, 771	1, 643	1, 663	2, 072	2, 147	2, 206

(注) 最高・最低株価は、東京証券取引所市場第一部におけるものです。

5【役員の状況】

男性 10名 女性 一名 (役員のうち女性の比率 ー%)

役名	職名	氏名	生年月日	略歴	任期	所有株式数 (千株)
取締役 会長		大迫 正男	昭和30年11月15日生	昭和54年4月 株式会社善隣（現当社）入社 平成4年6月 当社取締役東京事務所長 平成7年6月 当社常務取締役兼大阪支社長 平成9年7月 当社顧問 平成11年7月 当社執行役員社長室東京事務所部長 平成13年4月 当社執行役員社長室部長 平成13年6月 当社取締役副会長 平成18年6月 当社代表取締役副会長 平成20年4月 当社取締役副会長 平成23年4月 当社取締役会長（現任）	※1	447
代表取締役 社長	総合企画 室長	高山 善司	昭和37年4月24日生	昭和61年4月 当社入社 平成15年4月 当社東京第二支社長 平成16年4月 当社営業本部副本部長 平成17年4月 当社経営戦略室長 平成18年4月 当社営業本部長 平成18年6月 当社取締役 平成20年4月 当社代表取締役社長（現任） 兼経営戦略室長 平成25年4月 当社Z I P企画室長 平成28年4月 当社総合企画室長（現任）	※1	6
代表取締役 副社長		網田 純也	昭和34年6月23日生	昭和59年1月 当社入社 平成11年4月 当社電子地図本部データベース制作部長 平成13年4月 当社制作本部国内DB制作部長 平成15年4月 当社制作本部制作第二統括部長 平成15年8月 当社制作本部制作第二統括部長兼海外 DB制作部長 平成16年4月 当社I T S事業本部長 平成16年6月 当社取締役 平成17年4月 当社常務取締役 平成18年4月 当社経営企画室・I T S関連事業担当 平成19年4月 当社制作本部長兼I T S関連事業担当 平成20年4月 当社代表取締役副社長（現任） 平成22年4月 当社技術企画室長 平成22年7月 当社情報システム室長	※1	10
常務取締役	社長室長	柏木 順	昭和29年11月2日生	昭和52年4月 株式会社西日本相互銀行（現㈱西日本 シティ銀行）入行 平成12年7月 当社出向 平成14年4月 当社資本政策・株式I R担当部長 平成16年4月 当社管理本部副本部長 平成16年11月 当社入社 平成17年4月 当社社長室長 平成17年6月 当社取締役 平成19年4月 当社管理本部副本部長 平成20年4月 当社管理本部長 平成21年4月 当社経営管理室長 平成22年4月 当社常務取締役（現任） 平成23年11月 当社監査室長 平成26年4月 当社社長室長（現任）	※1	6
取締役		大迫 益男	昭和28年7月30日生	昭和52年4月 株式会社善隣（現当社）入社 昭和55年3月 当社取締役 昭和61年3月 当社常務取締役兼本社工場長 平成3年4月 当社専務取締役 平成4年6月 当社非常勤取締役（現任） ＜主な兼職＞ 平成17年6月 株式会社ゼンリンプリンテックス取締 役会長（現任）	※1	605

役名	職名	氏名	生年月日	略歴		任期	所有株式数 (千株)
取締役		清水 辰彦	昭和39年1月20日生	昭和61年4月 平成12年6月 平成14年4月 平成14年6月 平成15年4月 平成15年4月 平成18年6月 ＜主な兼職＞ 平成19年6月	当社入社 ZENRIN USA, INC. 副社長 株式会社ゼンリンデータコム出向 株式会社ゼンリンデータコム取締役 株式会社ゼンリンデータコム転籍 株式会社ゼンリンデータコム取締役 副社長 当社非常勤取締役（現任） 株式会社ゼンリンデータコム代表取締役社長（現任）	※1	6
取締役		塩次 喜代明	昭和22年10月8日生	平成4年4月 平成5年4月 平成13年6月 平成15年4月 平成23年3月 平成23年4月 平成24年4月 平成26年6月	松山大学経営学部教授 九州大学経済学部教授 株式会社産学連携機構九州取締役 九州大学産業マネジメント専攻長（ビジネス・スクール長） 九州大学名誉教授 福岡女子大学国際文理学部教授 福岡女子大学国際文理学部特命教授 当社社外取締役（現任）	※1	—
取締役 (監査等委員 ・常勤)		稲葉 和彦	昭和35年5月6日生	平成12年8月 平成14年1月 平成17年4月 平成17年6月 平成18年4月 平成19年4月 平成20年4月 平成21年4月 平成22年4月 平成22年7月 平成26年6月 平成28年6月	当社入社 当社管理本部経理部長 当社管理本部副本部長兼経理部長 当社取締役 当社管理本部長 当社経営企画室長 当社経営管理室長 当社統合情報システム室長 当社情報システム室長 当社I F R Sプロジェクト担当 当社監査役 当社取締役 監査等委員（現任）	※2	16
取締役 (監査等委員)		辻 孝浩	昭和42年3月30日生	平成4年10月 平成9年3月 平成12年9月 平成16年4月 平成19年8月 平成22年9月 平成22年11月 平成25年6月 平成26年8月 平成28年6月	監査法人トーマツ（現有限責任監査法人トーマツ）入所 公認会計士登録 株式会社アタックス入社 中央青山監査法人（みずず監査法人へ改称）入所 監査法人トーマツ（現有限責任監査法人トーマツ）入所 税理士登録 辻会計事務所設立（現任） 当社社外監査役 株式会社スリースターズ設立 代表取締役（現任） 当社社外取締役 監査等委員（現任）	※2	0
取締役 (監査等委員)		磯田 直也	昭和52年9月10日生	平成16年10月 平成16年10月 平成22年9月 平成23年6月 平成23年6月 平成27年6月 平成28年6月	弁護士登録（東京弁護士会） ユアサハラ法律特許事務所入所（現任） Dorsey & Whitney 法律事務所（ワシントン州シアトル）入所 Dorsey & Whitney 法律事務所（ワシントン州シアトル）退所 ニューヨーク州弁護士登録 当社社外監査役 当社社外取締役 監査等委員（現任）	※2	0
計							1,100

- (注) 1 取締役塩次喜代明、辻孝浩、磯田直也は、社外取締役であります。
- 2 当社の監査等委員会の体制は、次のとおりであります。
委員長 稲葉和彦、委員 辻孝浩、委員 磯田直也
- 3 監査等委員会は、監査等委員会の監査・監督機能を強化するため、取締役（監査等委員である取締役を除く。）からの情報収集及び重要な社内会議における情報共有並びに内部監査部門と監査等委員会との十分な連携を可能とするため、稲葉和彦を常勤の監査等委員として選定しております。
- 4 取締役大迫益男は、取締役会長大迫正男の兄であります。
- 5 ※1 取締役（監査等委員であるものを除く。）7名の任期は、平成29年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成30年3月期に係る定時株主総会終結の時までの1年間であります。
- ※2 監査等委員である取締役3名の任期は、平成28年3月期に係る定時株主総会終結の時から平成30年3月期に係る定時株主総会終結の時までの2年間であります。
- 6 当社は執行役員制度を導入しております。有価証券報告書提出日現在の執行役員の氏名等は、次のとおりであります。

氏 名	役 職 及 び 担 当
山 本 勝	上席執行役員第一事業本部長
藤 沢 秀 幸	上席執行役員第二事業本部長
鶴 岡 直 樹	執行役員総務・人事本部長
松 尾 正 実	執行役員コーポレート本部長
松 山 稔	執行役員事業企画本部長
仲 道 辰 郎	執行役員サーベイ本部長
宮 園 賢 司	執行役員D B制作本部長
二 又 博 之	執行役員商品制作本部長
庄 司 通	執行役員開発本部長

上記には、取締役兼務者を含めておりません。

- 7 当社は法令に定める監査等委員である取締役の員数を欠くことになる場合に備え、会社法第329条第3項の規定に基づき、補欠の監査等委員である取締役1名を選任しております。補欠の監査等委員である取締役の氏名等は、次のとおりであります。

氏名	生年月日	略歴	所有株式数 (千株)
塩次 喜代明	昭和22年10月8日生	平成4年4月 松山大学経営学部教授 平成5年4月 九州大学経済学部教授 平成13年6月 株式会社産学連携機構九州取締役 平成15年4月 九州大学産業マネジメント専攻長（ビジネス・スクール長） 平成23年3月 九州大学名誉教授 平成23年4月 福岡女子大学国際文理学部教授 平成24年4月 福岡女子大学国際文理学部特命教授 平成26年6月 当社社外取締役（現任）	—

6 【コーポレート・ガバナンスの状況等】

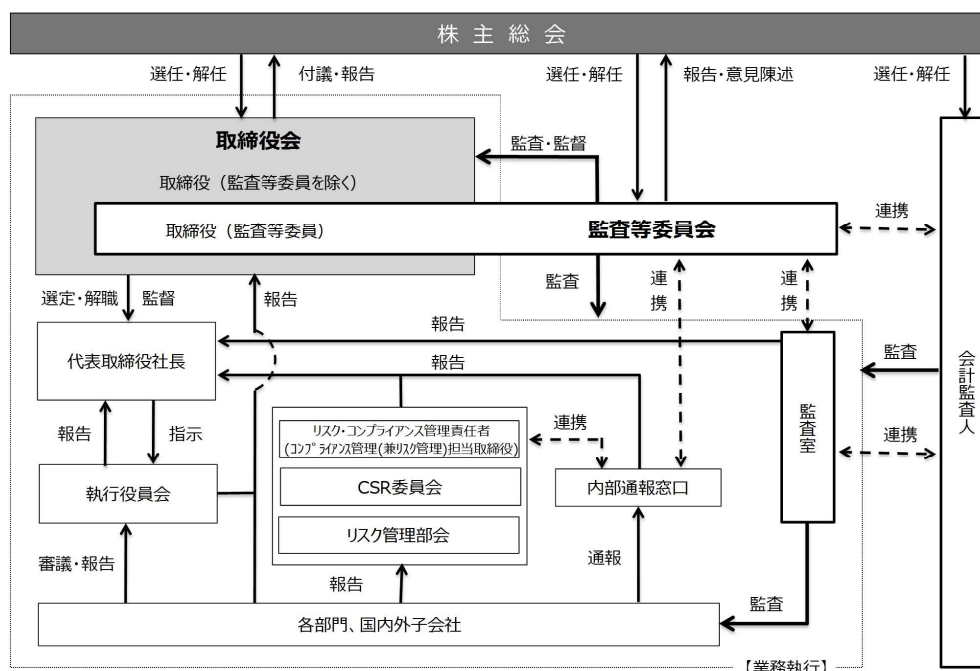
(1) 【コーポレート・ガバナンスの状況】

コーポレート・ガバナンスに関する基本的な考え方

当社は、株主をはじめとするステークホルダーに対して経営の透明性を確保し、合理的・効率的な経営活動を行うことによって、企業価値を継続的に高めることを経営の基本方針としております。

これらの実現のためには、コーポレート・ガバナンスを有効に機能させ、更にこの機能を充実させることが肝要であると考えております。

当社の機関・内部統制の仕組みは下図のとおりであります。



① 企業統治の体制

1) 企業統治の体制の概要

当社は、当社事業に精通した取締役に、業務執行に対する一層の監督機能の強化を図ることを目的として社外取締役3名を加えて取締役会を構成しております。また、執行役員制度の採用により、経営の意思決定及び業務執行の監督機能と、業務執行機能を分離することで、経営監督機能の充実と業務執行の効率性向上を図っております。

下記「1) (ii) 監査等委員会」、「② 内部監査及び監査等委員会監査の状況」に記載のとおり、充実した監査を行うことにより、監査等委員会による経営監視機能の強化を図っております。

(i) 取締役会

当社の取締役会は、社外取締役3名を含む10名の取締役に構成され、原則として月1回、また必要に応じて随時開催し、経営の意思決定及び業務執行の監督を行っております。

これに加えて、当社は、平成21年4月より、執行役員制度を導入し、執行役員への大幅な権限委譲を行うことにより、迅速かつ効率的な業務運営を行うことが可能な体制といたしました。

具体的には、執行役員で構成する執行役員会を毎月1回開催し、重要な業務執行案件の審議及び検討を行います。執行役員会の審議及び検討結果は、取締役会に報告し、重要事項の意思決定を効率的に行う体制を整えております。

更に当社は、半期毎に、業務執行取締役、執行役員及び子会社の代表が、各々の業務遂行状況を取締役会メンバーに報告することにより、業務執行の状況を確認できる体制を整えております。

(ii) 監査等委員会

監査等委員会は、監査等委員である取締役3名で構成しており、このうち過半数の2名が社外取締役であります。

監査等委員会は、監査等委員会規則及び監査等委員会監査等の基準を定め、これらに基づき、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の業務執行状況の監査、内部統制システムの構築・運用の状況についての監査、連結子会社の管理状況についての監査を行っております。また、監査等委員会は会計監査人及び監査室と連携して職務を執行するとともに、会計監査人の職務についても監視・検証しております。

なお、監査等委員である取締役（常勤）稲葉和彦は、当社において長年にわたり経理業務に携わっており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有するものであります。また、監査等委員である取締役（社外）辻孝浩は、公認会計士及び税理士の資格を有しており、財務及び会計に関する相当程度の知見を有するものであります。

2) 当該体制を採用する理由

当社は、コーポレート・ガバナンスをより一層充実させ、更なる企業価値の向上を図るため、平成28年6月17日開催の第56回定時株主総会での承認を経て、監査等委員会設置会社へ移行しております。

監査等委員が取締役として、経営の重要な事項について取締役会で議決権を行使できることや、業務執行取締役の業務執行状況を監視・監督し、その選解任及び報酬について株主総会で意見を述べることもなど、監査等委員の法律上の機能を活用することにより、取締役会の経営陣に対する監督機能が一層高まると考えております。

3) 内部統制システムの整備の状況

当社は創業以来、地図業界のリーディングカンパニーとして地図関連情報の提供を通じて、社会に貢献し続けることを活動の基本として事業を拡大してまいりました。当社グループは、「知・時空間情報の創造により人びとの生活に貢献します」を企業理念として掲げ、「Maps to the Future」のスローガンのもと、地図情報で未来を創造していくことを使命として企業運営を行っております。そして、情報化社会の発展により地図情報に求められる価値やニーズが大きく変化を続ける今、私たちは「より適した価値」を実現することで、「情報を地図化する世界一の企業」となることを目指しております。

このような当社の経営目標を達成し、継続的な企業価値の向上を図るため、当社は、法令違反及びその他事業活動によって生じる様々なリスクを的確に把握するとともに、それらのリスクを適切にコントロールし、業務の適正性を確保する観点から、次のとおり内部統制システムを整備しております。

当社は、このような内部統制システムの整備及びその実効性を確保することが、株主、取引先、地域社会その他のステークホルダーの信頼の源泉であり、企業経営の基本であると位置づけております。

(i) コンプライアンス体制の整備の状況

当社は、取締役及び使用人の職務の執行が法令及び定款に適合することを確保するため、行動憲章・行動基準を定めるとともに、CSR委員会を設置し、CSR委員会委員長の統括のもと、各本部・各部門にわたる全社的なコンプライアンス管理体制の整備を図り、その啓発活動等を行っております。

なお、コンプライアンス状況のモニタリング、内部通報者の保護を目的として内部通報窓口を社内及び社外に設置しております。内部通報窓口にて受け付けた通報事実は、通報者の地位の保護及びプライバシーに配慮した上で、その真偽を調査するとともに、真実であった場合には是正措置を実施し、必要に応じて情報開示委員会での審議を経て情報の適時開示を行うこととしております。また、内部通報者に対し、内部通報をしたことを理由として、解雇その他不利な取り扱いを行ってはならないと定めております。

(ii) リスク管理体制の整備の状況

当社は、企業活動に関連する内外の様々なリスクを統一的かつ適切に管理するため、リスク管理の方針をリスク管理規程に定めるとともに、CSR委員会の下部組織としてリスク管理部会を設置し、CSR委員会委員長の統括のもと、各本部・各部門にわたる全社的なリスク管理体制を構築しております。

このような管理体制のもと、各部門は、毎年1回各々所管する業務に関連するリスクの抽出及び特定、優先度の設定、並びにその予防・軽減策及び活動計画をリスク管理部会に報告し、その承認を得て活動しております。

また、リスクが顕在化し緊急事態が発生した場合には、適宜、リスク管理部会を招集の上、対策本部を設置し、事業継続計画（BCP）、危機管理マニュアル及び防災マニュアルに従って迅速に対応するとともに、必要に応じて情報開示委員会での審議を経て、情報の適時開示を行うこととしております。なお、その実効性を向上させるため、関係者に対し、危機管理に係るトレーニングを実施しております。

(iii) 情報管理体制の整備の状況

当社は、取締役及び使用人の職務の執行に係る情報については、文書（電磁記録を含む。）の作成、保存、廃棄等のルールを定めた文書管理規程により管理する体制を整えております。

このような文書管理に加えて、職務の執行に係る重要情報の保全のため、情報セキュリティ管理体制を整備しております。

(iv) 財務報告に関する統制

当社は、財務報告に係る内部統制の実効性を確保し向上させるため、体制を整備し、運用の定着を継続的に図っており、会計処理に関する諸規程や運用ルール の制定、評価システムの整備及び関連する情報システムの高度化に取り組んでおります。

また、当社決算業務に関して会計監査人と協議を行う場として、決算直前に「決算方針検討会」を、決算後には「決算報告会」を開催し、会計監査人との意見交換や対応策の検討及び協議を行っております。

(v) 子会社の業務の適正を確保するための体制整備の状況

当社は、子会社に対する管理の適正化を図ること等を目的として、関係会社管理規程を定めております。

また、子会社の代表より半期毎に業務や事業計画の進行状況を当社取締役会メンバーへ報告し、その状況を把握しております。また、当社の監査室は、子会社に対して定期監査を実施しております。

(vi) 反社会的勢力排除に向けた基本的な考え方及びその整備の状況

(1) 基本的な考え方

当社は、「企業行動憲章」において、市民社会の秩序や安全に脅威を与える反社会的勢力に対しては、断固たる態度で臨むことを定めております。

このように、反社会的勢力に対して断固たる態度で臨み、関係排除に取り組むことは、企業の社会的責任の観点から必要かつ重要であるとともに、企業防衛の観点からも必要不可欠な要請であり、コンプライアンスそのものであるとの認識のもと、以下のとおり、反社会的勢力による被害を防止するための対策に取り組んでおります。

(2) 整備の状況

当社は、「企業行動憲章」において、反社会的勢力に対しては、断固たる態度で臨むことを定めるとともに、具体的な行動基準を定め、社内に周知しております。

a. 対応統括部署及びマニュアル等の整備

総務部を対応統括部署として専任スタッフを配置するとともに、適切かつ迅速な対応を図るため、マニュアル等の整備に努めております。

b. 外部の専門機関との連携及び情報収集・啓発活動

暴力追放運動推進センター、企業防衛対策協議会、その他反社会的勢力の排除を目的とする外部の専門機関が行う地域や職域の活動に参加し、専門機関との緊密な連携関係の構築、情報の収集及び適切な対応のための啓発に努めております。

4) 責任限定契約

当社は、会社法第427条第1項の規定に基づき、平成28年6月17日開催の第56回定時株主総会での承認を経て定款を変更し、取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）に対する同法第423条第1項の損害賠償責任の限定に関する規定を設けております。

当該定款に基づき、当社が取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）と締結した責任限定契約に基づく損害賠償責任の限度額は、会社法第425条第1項に定める最低責任限度額であります。

② 内部監査及び監査等委員会監査の状況

当社は、代表取締役社長直轄の組織として監査室（内部監査部門と内部統制部門の相互連携を図るため、両部門を監査室に所属させております。）を設置しております。監査室は、財務報告に係る内部統制に関わる業務の運用状況の点検・確認のほか、業務全般の品質向上、事故の未然防止を目的に、当社及び連結子会社の内部監査を実施しており、有価証券報告書提出日現在13名が従事しております。

内部監査は、年間の監査方針及び基本計画からなる基本計画書、並びに基本計画書に基づいて作成する実施計画書に従い、実地監査によって行っております。監査の結果については、速やかに代表取締役社長へ報告するとともに、監査報告会（四半期毎開催）においても報告しております。また、適宜改善を要請し、改善状況を確認するとともに、別途フォローアップ監査を実施することで、確実に業務が改善できるよう体制を整えております。

監査等委員会は、「1) (ii) 監査等委員会」に記載のとおり、監査等委員会規則及び監査等委員会監査等の基準に基づき監査を行い、監査において発見した問題点等については、代表取締役社長と適宜協議を行い是正を図っております。

監査等委員会の職務を補助するため、監査室内に専任者を配置しております。当該使用人は、監査等委員会の業務を補助する事項に関しては、監査等委員会の指揮命令により職務を遂行しており、当該使用人の人事異動は、監査等委員会と事前に協議を行います。また、当該使用人に対する取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び業務執行者からの独立性を確保しております。

監査等委員会は、会計監査人と四半期毎に定期会合を開催し、会計監査人から会計監査計画とその実施状況の報告を受けるとともに、監査上の留意事項についての意見交換を行っております。また、この定期会合には、監査室長も同席し情報共有を図るとともに、内部監査の実施状況及び内部統制の整備・運用状況を報告し、会計監査人と監査室の相互連携を図っております。

監査等委員会と監査室は、原則として毎月連絡会を開催し、監査等委員会は、監査室から内部監査の実施状況及び内部統制の整備・運用状況の報告を受けるとともに、監査室の代表取締役社長に対する監査報告会に出席し、相互連携を図っております。

③ 社外取締役

当社は、社外取締役を3名（うち監査等委員である取締役2名）選任しております。

取締役（監査等委員である取締役を除く。）塩次喜代明は経営学の専門家として企業経営に関する豊富な経験と知識を有しており、客観的立場から当社経営全般に対して提言することにより、当社取締役会での意思決定における客観性、公平性が高まり、コーポレート・ガバナンスがより一層強化できるものと考えております。

また、監査等委員である取締役辻孝浩及び磯田直也は、財務・会計や企業法務等の専門的な知識を有しており、監査等委員として客観的な意見表明等を行うことにより、監査等の実効性確保に資するものと考えております。

当社は、当社の持続的成長と中長期的な企業価値の向上に貢献できる人物を、会社法に定める社外取締役の範囲、並びに金融商品取引所が定める独立性基準に従い、独立社外取締役として選任しており、社外取締役3名全員を独立役員に指定しております。

有価証券報告書提出日現在、社外取締役による当社株式の保有状況は、「第4. 5. 役員の状況」の所有株式数欄に記載のとおりであります。人的関係、取引関係その他利害関係について該当事項はありません。

④ 会計監査の状況

当事業年度に係る監査において、業務を執行した公認会計士の氏名、監査業務に係る補助者の構成は、次のとおりであります。なお、監査責任者及び補助者は全て有限責任監査法人トーマツに所属しております。

1) 業務を執行した公認会計士の氏名

監査責任者	公認会計士	磯 俣 克 平
	公認会計士	寺 田 篤 芳
	公認会計士	室 井 秀 夫

2) 監査業務に係る補助者の構成

公認会計士4名、公認会計士試験合格者3名及びその他の者3名

⑤ 役員報酬等

1) 役員区分ごとの報酬等の総額、報酬等の種類別の総額及び対象となる役員の員数

役員区分	報酬等の総額 (百万円)	報酬等の種類別の総額（百万円）			対象となる役員 の員数（人）
		基本報酬	賞与	役員株式給付 引当金繰入額	
取締役（監査等委員を除く） （社外取締役を除く）	238	134	84	20	6
取締役（監査等委員） （社外取締役を除く）	13	12	—	0	1
監査役 （社外監査役を除く）	3	3	—	—	1
社外役員	14	12	—	1	3

（注） 1 監査役に対する報酬の額は、監査等委員会設置会社移行前の期間に係るものであり、監査等委員である取締役に対する報酬等の額は、移行後の期間に係るものであります。

2 当社は、平成28年6月17日開催の第56回定時株主総会決議に基づき、同日付けをもって監査等委員会設置会社に移行しております。

3 取締役の報酬限度額は、次のとおりであります。

取締役（監査等委員である取締役を除く。）

500百万円以内（うち社外取締役30百万円）

（平成28年6月17日 第56回定時株主総会決議）

監査等委員である取締役

200百万円以内

（平成28年6月17日 第56回定時株主総会決議）

また、上記報酬限度額とは別枠で、平成28年6月17日開催の第56回定時株主総会において、役員株式給付信託（BBT）の導入を決議いただいております。

4 監査役の報酬限度額は、次のとおりであります。

監査役 100百万円（平成18年6月23日 第46回定時株主総会決議）

5 取締役賞与は、単年度の業績達成度に応じて総支給額を決定する業績連動報酬として現金にて、役員株式給付信託（BBT）は、役位や中長期の業績達成度に応じて当社株式等にて支給するものであります。

6 上記取締役賞与は、取締役4名に対するものであります。

2) 役員の報酬等の額又はその算定方法の決定に関する方針の内容及び決定方法

(i) 報酬支給の目的

当社の役員報酬等は、当社グループのステークホルダーの利益に連動させつつ、当社グループの企業価値向上による社会貢献を図るため、各取締役が委託された業務遂行に邁進できる一定水準の生活基盤を保証するものといたします。更に、一層のモチベーション向上を図るとともに、委託したミッションを遂行し得る人材を継続的に確保することを目的として支給しております。

(ii) 報酬要素及び算定方法

当社の取締役（監査等委員である取締役を除く。）の全報酬は、固定報酬、賞与（年次インセンティブ報酬）、株式報酬から構成され、固定報酬及び賞与は現金にて、株式報酬は役員株式給付規程に基づき当社株式等にて支給しております。

監査等委員である取締役の報酬は、固定報酬と株式報酬であり、固定報酬を現金にて、株式報酬は役員株式給付規程に基づき当社株式等にて支給しております。

(1) 固定報酬

取締役（監査等委員である取締役を除く。）及び監査等委員である取締役の固定報酬は、当社連結上の利益水準や企業規模をベースとして、国内の上場企業の取締役報酬水準と相対的に比較検討し、取締役会及び監査等委員会にて役位毎に規定の上、決定しております。

なお、経営環境等の変化が生じた場合は適時適切に見直しを行います。

(2) 賞与（年次インセンティブ報酬）

取締役（監査等委員である取締役を除く。）の賞与は、目標達成度に対する実績還元、一層のモチベーション高揚を目的に、単年度の業績達成度に応じて総支給額を決定する業績連動報酬とすることを規定の上、取締役会にて決定しております。総支給額の決定方法は、ステークホルダーの利益との連動性を高めるため、プロフィットシェアリング（利益の一定割合を総支給額の前原資とする）方式により算定し、その総額を公表しております。

(3) 株式報酬

取締役の報酬と当社の中長期業績及び株式価値との連動性をより明確にし、監査等委員である取締役以外の取締役（業務執行取締役であるもの。）が中長期的な業績の向上と企業価値の拡大に貢献する意識を高めること、監査等委員である取締役以外の取締役（業務執行取締役以外の取締役であるもの。）及び監査等委員である取締役が、監査又は監督を通じた企業価値の拡大に貢献することを目的としております。

当社が定めた役員株式給付規程に基づき、各事業年度に関して、監査等委員である取締役以外の取締役（業務執行取締役であるもの。）に対しては、役位、業績達成度等により定まる数のポイントを付与し、監査等委員である取締役以外の取締役（業務執行取締役以外の取締役であるもの。）及び監査等委員である取締役に対しては、役位により定まる数のポイントを付与し、退任時に当該付与ポイント相当の当社株式等を給付することとしております。

(4) その他

当社は、平成18年6月23日開催の第46回定時株主総会において、役員退職慰労金制度廃止に伴う取締役及び監査役に対する打ち切り支給を決議いただいております。なお、支給時期は制度廃止時に在任していたそれぞれの役員の退任時としております。

⑥ 株式の保有状況

1) 投資株式のうち保有目的が純投資目的以外の目的であるものの銘柄数及び貸借対照表計上額の合計額

63銘柄 2,917百万円

2) 保有目的が純投資目的以外の目的である投資株式の保有区分、銘柄、株式数、貸借対照表計上額及び保有目的
(前事業年度)

特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
コカ・コーラウエスト(株)	134,906	375	地域経済界での関係維持
(株)カカクコム	154,200	322	取引関係維持
(株)長府製作所	118,600	309	地域経済界での関係維持
(株)西日本シティ銀行	1,502,202	298	取引関係維持
第一交通産業(株)	150,000	210	地域経済界での関係維持
トヨタ自動車(株)	20,000	119	取引関係維持
(株)アパマンショップホールディングス	57,600	102	取引関係維持
(株)ふくおかフィナンシャルグループ	166,625	61	取引関係維持
(株)安川電機	43,000	55	地域経済界での関係維持
(株)スターフライヤー	14,000	51	地域経済界での関係維持
日本電信電話(株)	10,200	49	取引関係維持
TOTO(株)	12,000	42	地域経済界での関係維持
(株)山口フィナンシャルグループ	34,000	34	取引関係維持
(株)ナフコ	15,000	24	地域経済界での関係維持
(株)十八銀行	42,500	10	取引関係維持
第一生命保険(株)	5,600	7	取引関係維持
(株)マツモト	18,000	5	取引関係維持
黒崎播磨(株)	3,000	0	地域経済界での関係維持
(株)九州リースサービス	1,000	0	取引関係維持
(株)昭文社	450	0	業界情報の取得

みなし保有株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
コカ・コーラウエスト(株)	189,000	526	議決権行使に関する指示権限
(株)九州リースサービス	1,099,000	479	議決権行使に関する指示権限
(株)西日本シティ銀行	300,000	59	議決権行使に関する指示権限

(注) 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していません。

(当事業年度)
特定投資株式

銘柄	株式数 (株)	貸借対照表計上額 (百万円)	保有目的
コカ・コーラウエスト㈱	134,906	484	地域経済界での関係維持
㈱西日本フィナンシャルホールディングス	300,440	334	取引関係維持
㈱長府製作所	118,600	308	地域経済界での関係維持
第一交通産業㈱	150,000	265	地域経済界での関係維持
㈱カカコム	154,200	233	取引関係維持
トヨタ自動車㈱	20,000	120	取引関係維持
㈱安川電機	43,000	96	地域経済界での関係維持
㈱ふくおかフィナンシャルグループ	166,625	80	取引関係維持
TOTO㈱	12,000	50	地域経済界での関係維持
㈱スターフライヤー	14,000	49	地域経済界での関係維持
日本電信電話㈱	10,200	48	取引関係維持
㈱アパマンショップホールディングス	57,600	46	取引関係維持
㈱山口フィナンシャルグループ	34,000	41	取引関係維持
九州旅客鉄道㈱	10,000	34	取引関係維持
㈱ナフコ	15,000	26	地域経済界での関係維持
㈱十八銀行	42,500	15	取引関係維持
第一生命ホールディングス㈱	5,600	11	取引関係維持
㈱マツモト	18,000	5	取引関係維持
黒崎播磨㈱	3,000	1	地域経済界での関係維持
㈱九州リースサービス	1,000	0	取引関係維持
㈱昭文社	450	0	業界情報の取得

- (注) 1 コカ・コーラウエスト㈱は、平成29年4月1日付でコカ・コーラボトラーズジャパン㈱へ商号変更しております。
- 2 ㈱西日本フィナンシャルホールディングスは、平成28年10月3日付で㈱西日本シティ銀行から株式移転され、持株会社として設立されております。この株式移転に伴い、㈱西日本シティ銀行の普通株式1株につき0.2株の割合で㈱西日本フィナンシャルホールディングス株式の割当交付を受けております。
- 3 第一交通産業㈱は、平成29年4月1日付で普通株式1株につき2株の割合で株式分割しております。
- 4 第一生命ホールディングス㈱は、平成28年10月1日付で、第一生命保険㈱から商号変更しております。

銘柄	株式数（株）	貸借対照表計上額 （百万円）	保有目的
㈱九州リースサービス	1,099,000	907	議決権行使に関する指示権限
コカ・コーラウエスト㈱	189,000	678	議決権行使に関する指示権限
㈱西日本フィナンシャルホールディングス	60,000	66	議決権行使に関する指示権限

- (注) 1 貸借対照表計上額の上位銘柄を選定する段階で、特定投資株式とみなし保有株式を合算していません。
- 2 コカ・コーラウエスト㈱は、平成29年4月1日付でコカ・コーラボトラーズジャパン㈱へ商号変更しております。
- 3 ㈱西日本フィナンシャルホールディングスは、平成28年10月3日付で㈱西日本シティ銀行から株式移転され、持株会社として設立されております。この株式移転に伴い、㈱西日本シティ銀行の普通株式1株につき0.2株の割合で㈱西日本フィナンシャルホールディングス株式の割当交付を受けております。

⑦ その他、会社の機関設計に関する定款規定等の内容

1) 取締役の定数

当社は、取締役（監査等委員である取締役を除く。）の員数を12名以内、監査等委員である取締役の員数を5名以内とする旨を定款に定めております。

2) 取締役選任の決議要件

当社は、会社法第341条に定める取締役選任の株主総会の決議要件について、監査等委員である取締役とそれ以外の取締役とを区別して、議決権を行使できる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の過半数をもって行う旨を、またその決議については、累積投票によらない旨を定款に定めております。

3) 株主総会決議事項を取締役会で決議することができる事項及びその理由

(i) 取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）の損害賠償責任

当社は、「4) 責任限定契約」に記載のとおり、取締役が期待される役割を十分に発揮できるようにすることを目的として、取締役（業務執行取締役等であるものを除く。）の損害賠償責任を、法令の限度において、取締役会の決議により免除することができる旨を定款に定めております。

なお、第56回定時株主総会終結前の行為に関する会社法第423条第1項の監査役（監査役であった者を含む。）の損害賠償責任についても、法令の限度において、取締役会の決議により免除することができる旨を定款に定めております。

(ii) 剰余金の配当等

当社は、機動的な配当政策及び資本政策を図るため、剰余金の配当等（自己株式の取得を含む。）を取締役会の決議により行うことを可能とする旨を定款に定めております。

※ 当事業年度における期末配当につきましては、定時株主総会決議に基づき実施しております。詳細は、「第4. 3. 配当政策」をご参照ください。

4) 株主総会の特別決議要件を変更した内容及びその理由

当社は、会社法第309条第2項に定める株主総会の特別決議要件について、議決権を行使できる株主の議決権の3分の1以上を有する株主が出席し、その議決権の3分の2以上をもって行う旨を定款に定めております。これは、株主総会における特別決議の定足数を緩和することにより、株主総会の円滑な運営を行うことを目的とするものであります。

なお、当社は、平成20年6月19日開催の第48回定時株主総会において定款を変更し、新たな種類の株式を発行することを可能するとともに、上記定めを、会社法第324条第2項の規定による当該種類株主総会の決議に準用する旨を定めております。

5) 種類株式の議決権行使に関する取扱いの差異及びその理由

前項により発行することができる第1種優先株式は、株主総会において、全部の事項につき議決権を行使することができないこととしております。その理由は、将来において機動的かつ柔軟な資本政策を実行するにあたり、既存の株主へ与える影響を考慮したためであります。但し、当該株主総会の過去2年間に於いて、法令及び定款に従って優先配当を行う旨の決議が行われなかったときは、優先配当の支払いが行われるまでの間は、この限りではありません。

なお、有価証券報告書提出日現在、当社は、第1種優先株式を発行していません。

(2) 【監査報酬の内容等】

① 【監査公認会計士等に対する報酬の内容】

区分	前連結会計年度		当連結会計年度	
	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）	監査証明業務に基づく報酬（百万円）	非監査業務に基づく報酬（百万円）
提出会社	42	2	41	—
連結子会社	9	—	9	—
計	51	2	50	—

② 【その他重要な報酬の内容】

（前連結会計年度）

提出会社の連結子会社であるZENRIN USA, INC. は、当社の監査公認会計士等と同一のネットワークに属しているDeloitte & Touche LLP及びDeloitte Tax LLPに対して、レビュー業務、税務申告業務などの対価として16百万円を支払っております。

（当連結会計年度）

該当事項はありません。

③ 【監査公認会計士等の提出会社に対する非監査業務の内容】

（前連結会計年度）

財務・税務デューデリジェンスに係る業務を委託し対価を支払っております。

（当連結会計年度）

該当事項はありません。

④ 【監査報酬の決定方針】

（前連結会計年度）

提出会社では、監査報酬の決定方針の定めはございませんが、監査契約の締結につきましては、監査日程や監査計画などを検討し、監査役会の同意を得て取締役会で決議しております。

なお、監査等委員会設置会社へ移行後は、監査等委員会の同意を得て取締役会で決議することとしております。

（当連結会計年度）

提出会社では、監査報酬の決定方針の定めはございませんが、監査契約の締結につきましては、監査日程や監査計画などを検討し、監査等委員会の同意を得て取締役会で決議しております。

第5【経理の状況】

1. 連結財務諸表及び財務諸表の作成方法について

- (1) 当社の連結財務諸表は、「連結財務諸表の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和51年大蔵省令第28号）に基づいて作成しております。
- (2) 当社の財務諸表は、「財務諸表等の用語、様式及び作成方法に関する規則」（昭和38年大蔵省令第59号。以下「財務諸表等規則」という。）に基づいて作成しております。
また、当社は、特例財務諸表提出会社に該当し、財務諸表等規則第127条の規定により財務諸表を作成しております。

2. 監査証明について

当社は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づき、連結会計年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）の連結財務諸表及び事業年度（平成28年4月1日から平成29年3月31日まで）の財務諸表について、有限責任監査法人トーマツによる監査を受けております。

3. 連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みについて

当社は、連結財務諸表等の適正性を確保するための特段の取組みを行っております。具体的には、会計基準等の内容を適切に把握し、会計基準等の変更についての的確に対応することができる体制を整備するため、公益財団法人財務会計基準機構へ加入し、積極的な情報収集に努めております。また、同機構や監査法人の行うセミナーに参加しております。

1 【連結財務諸表等】

(1) 【連結財務諸表】

① 【連結貸借対照表】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	※1 5,105	※1 6,824
受取手形及び売掛金	12,806	14,475
電子記録債権	68	87
有価証券	3	—
商品及び製品	※3 829	※3 760
仕掛品	318	313
原材料及び貯蔵品	83	65
繰延税金資産	1,543	2,045
その他	1,029	1,102
貸倒引当金	△8	△16
流動資産合計	21,777	25,658
固定資産		
有形固定資産		
建物及び構築物（純額）	5,230	5,044
機械装置及び運搬具（純額）	141	133
土地	6,744	6,743
リース資産（純額）	2,034	2,401
建設仮勘定	11	42
その他（純額）	590	552
有形固定資産合計	※4 14,753	※4 14,917
無形固定資産		
のれん	860	1,549
ソフトウェア	11,657	11,825
リース資産	34	51
その他	2,673	1,965
無形固定資産合計	15,226	15,392
投資その他の資産		
投資有価証券	※2 3,431	※2 3,749
長期貸付金	9	10
退職給付に係る資産	2,657	3,566
繰延税金資産	284	185
その他	※1 1,791	1,814
貸倒引当金	△120	△146
投資その他の資産合計	8,053	9,181
固定資産合計	38,032	39,491
資産合計	59,810	65,150

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	2,875	2,555
短期借入金	2,154	2,879
リース債務	759	745
未払費用	3,403	4,290
未払法人税等	951	1,896
繰延税金負債	0	2
前受金	2,313	3,535
役員賞与引当金	111	160
返品調整引当金	4	3
その他	1,788	2,013
流動負債合計	14,363	18,082
固定負債		
長期借入金	1,344	665
リース債務	1,311	1,489
繰延税金負債	102	303
役員退職慰労引当金	132	132
役員株式給付引当金	—	22
退職給付に係る負債	237	238
資産除去債務	36	37
その他	784	714
固定負債合計	3,950	3,603
負債合計	18,314	21,686
純資産の部		
株主資本		
資本金	6,557	6,557
資本剰余金	13,314	13,491
利益剰余金	21,537	22,750
自己株式	△2,013	△2,192
株主資本合計	39,395	40,607
その他の包括利益累計額		
その他有価証券評価差額金	355	441
為替換算調整勘定	△26	18
退職給付に係る調整累計額	419	993
その他の包括利益累計額合計	748	1,454
非支配株主持分	1,352	1,401
純資産合計	41,496	43,463
負債純資産合計	59,810	65,150

②【連結損益計算書及び連結包括利益計算書】

【連結損益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	54,970	57,819
売上原価	33,092	33,699
売上総利益	21,877	24,120
販売費及び一般管理費		
人件費	10,688	11,401
役員賞与引当金繰入額	113	165
役員株式給付引当金繰入額	—	22
退職給付費用	254	273
貸倒引当金繰入額	19	57
その他	7,762	7,964
販売費及び一般管理費合計	※1 18,839	※1 19,885
営業利益	3,038	4,234
営業外収益		
受取利息	18	11
受取配当金	114	120
持分法による投資利益	102	23
不動産賃貸料	51	46
保険配当金	34	40
その他	124	105
営業外収益合計	445	347
営業外費用		
支払利息	35	35
貸与資産減価償却費	7	7
その他	13	11
営業外費用合計	56	54
経常利益	3,427	4,527
特別利益		
固定資産売却益	※2 0	※2 1
投資有価証券売却益	6	12
子会社清算益	16	—
持分変動利益	28	—
その他	3	—
特別利益合計	54	14
特別損失		
固定資産除売却損	※3 217	※3 181
減損損失	※4 209	※4 120
その他	12	13
特別損失合計	440	315
税金等調整前当期純利益	3,042	4,226
法人税、住民税及び事業税	1,363	2,167
法人税等調整額	61	△476
法人税等合計	1,425	1,691
当期純利益	1,616	2,535
非支配株主に帰属する当期純利益	6	73
親会社株主に帰属する当期純利益	1,610	2,462

【連結包括利益計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
当期純利益	1,616	2,535
その他の包括利益		
その他有価証券評価差額金	△127	85
為替換算調整勘定	△148	△23
退職給付に係る調整額	△501	573
持分法適用会社に対する持分相当額	△70	47
その他の包括利益合計	※ △847	※ 683
包括利益	768	3,218
(内訳)		
親会社株主に係る包括利益	774	3,167
非支配株主に係る包括利益	△6	51

③【連結株主資本等変動計算書】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	6,557	13,111	21,068	△2,842	37,894
当期変動額					
剰余金の配当			△1,141		△1,141
親会社株主に帰属する当期純利益			1,610		1,610
自己株式の取得				△2	△2
自己株式の処分		374		831	1,205
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動		△171			△171
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	202	469	828	1,500
当期末残高	6,557	13,314	21,537	△2,013	39,395

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額 合計		
当期首残高	478	183	921	1,583	2,484	41,963
当期変動額						
剰余金の配当						△1,141
親会社株主に帰属する当期純利益						1,610
自己株式の取得						△2
自己株式の処分						1,205
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動						△171
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	△122	△210	△501	△835	△1,132	△1,967
当期変動額合計	△122	△210	△501	△835	△1,132	△467
当期末残高	355	△26	419	748	1,352	41,496

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本				
	資本金	資本剰余金	利益剰余金	自己株式	株主資本合計
当期首残高	6,557	13,314	21,537	△2,013	39,395
当期変動額					
剰余金の配当			△1,249		△1,249
親会社株主に帰属する当期純利益			2,462		2,462
自己株式の取得				△511	△511
自己株式の処分		177		332	510
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動					—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）					
当期変動額合計	—	177	1,213	△178	1,211
当期末残高	6,557	13,491	22,750	△2,192	40,607

	その他の包括利益累計額				非支配株主持分	純資産合計
	その他有価証券 評価差額金	為替換算 調整勘定	退職給付に係る 調整累計額	その他の包括 利益累計額 合計		
当期首残高	355	△26	419	748	1,352	41,496
当期変動額						
剰余金の配当						△1,249
親会社株主に帰属する当期純利益						2,462
自己株式の取得						△511
自己株式の処分						510
非支配株主との取引に係る親会社の持分変動						—
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）	86	45	573	705	49	755
当期変動額合計	86	45	573	705	49	1,967
当期末残高	441	18	993	1,454	1,401	43,463

④【連結キャッシュ・フロー計算書】

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		
税金等調整前当期純利益	3,042	4,226
減価償却費	5,181	5,591
減損損失	209	120
のれん償却額	314	361
退職給付に係る資産の増減額 (△は増加)	△115	△83
退職給付に係る負債の増減額 (△は減少)	4	5
受取利息及び受取配当金	△132	△131
支払利息	35	35
持分法による投資損益 (△は益)	△102	△23
固定資産除売却損益 (△は益)	217	180
投資有価証券売却損益 (△は益)	△6	△12
持分変動損益 (△は益)	△28	—
子会社清算損益 (△は益)	△16	—
売上債権の増減額 (△は増加)	△668	△1,605
たな卸資産の増減額 (△は増加)	249	78
仕入債務の増減額 (△は減少)	366	△340
未払費用の増減額 (△は減少)	384	884
前受金の増減額 (△は減少)	1,080	1,201
未払消費税等の増減額 (△は減少)	△326	269
その他	△321	△192
小計	9,367	10,564
利息及び配当金の受取額	133	123
利息の支払額	△35	△35
法人税等の支払額	△861	△1,334
営業活動によるキャッシュ・フロー	8,604	9,318
投資活動によるキャッシュ・フロー		
有形及び無形固定資産の取得による支出	△4,582	△4,416
投資有価証券の取得による支出	△330	△127
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の取得による支出	—	※2 △809
連結の範囲の変更を伴う子会社株式の売却による収入	—	※3 20
その他	△31	20
投資活動によるキャッシュ・フロー	△4,945	△5,313
財務活動によるキャッシュ・フロー		
長期借入れによる収入	—	500
長期借入金の返済による支出	△486	△433
リース債務の返済による支出	△992	△1,058
自己株式の取得による支出	△2	△511
自己株式の売却による収入	299	510
配当金の支払額	△1,140	△1,248
非支配株主への配当金の支払額	△79	△5
連結の範囲の変更を伴わない子会社株式の取得による支出	△312	—
その他	△2,185	△2
財務活動によるキャッシュ・フロー	△4,900	△2,248
現金及び現金同等物に係る換算差額	△53	△37
現金及び現金同等物の増減額 (△は減少)	△1,294	1,718
現金及び現金同等物の期首残高	6,393	5,099
現金及び現金同等物の期末残高	※1 5,099	※1 6,817

【注記事項】

(連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項)

1. 連結の範囲に関する事項

連結子会社の数 14社

主要な連結子会社の名称

(株)ゼンリンプリンテックス

(株)ゼンリンデータコム

平成28年4月1日付の(株)ゼンリンジオインテリジェンス(旧(株)JPSマーケティング)の株式取得に伴い、当連結会計年度より、同社を連結の範囲に含めております。

平成28年9月12日付のAbalta Technologies, Inc.の株式取得に伴い、当連結会計年度より、同社及びその子会社であるAbalta Technologies EOODを連結の範囲に含めております。

平成28年5月31日付のINFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD.の株式の一部売却に伴い、前連結会計年度に連結子会社でありました同社及びその子会社であるINFOTRACK TELEMATICS PRIVATE LIMITEDを連結の範囲から除外しております。

2. 持分法の適用に関する事項

(1) 持分法を適用した関連会社の数 2社

会社の名称

C.E. Info Systems Private Limited

INFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD.

連結子会社であったINFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD.の株式の一部売却に伴い、平成28年5月31日に同社を連結の範囲から除外し持分法適用関連会社といたしました。

(2) 持分法を適用しない関連会社の名称等

ダイナミックマップ基盤企画(株)

ダイナミックマップ基盤企画(株)は影響が一時的であると認められるため、持分法の適用範囲から除外しております。

3. 連結子会社の事業年度等に関する事項

連結子会社のうち、決算日が連結決算日と異なる会社は、次のとおりであります。

会社名	決算日
ZENRIN USA, INC.	12月31日
ZENRIN EUROPE GmbH	12月31日
Abalta Technologies, Inc.	12月31日
上海大計数据处理公司	12月31日
Abalta Technologies EOOD	12月31日

なお、連結財務諸表の作成にあたっては連結子会社の同日現在の財務諸表を使用し、連結決算日との間に生じた連結会社相互間の重要な取引については、連結上必要な調整を行うこととしております。

4. 会計方針に関する事項

(1) 重要な資産の評価基準及び評価方法

① 有価証券

その他有価証券

時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法(評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定)

時価のないもの

移動平均法による原価法

② たな卸資産

主として総平均法による原価法(貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定)

(2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法

① 有形固定資産（リース資産を除く）

定額法

（主な耐用年数）

建物 15年～50年

機械装置及び運搬具 5年～10年

② 無形固定資産（リース資産を除く）

ソフトウェア

a. 市場販売目的のソフトウェア

見込販売数量に基づく償却額と3年を限度とする残存有効期間に基づく均等配分額とを比較し、いずれか大きい額を償却する方法

b. 自社利用ソフトウェア

5年を限度とする利用可能期間で定額法により償却する方法

③ リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

(3) 重要な引当金の計上基準

① 単行本在庫調整引当金

住宅地図帳の売れ残り書籍の評価損に備えるため、出版部数に対する一定期間の販売部数を算定基礎とした評価損失見込額を計上しております。

② 貸倒引当金

営業債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

③ 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、当連結会計年度に係る支給見込額を計上しております。

④ 返品調整引当金

出版物の返品による損失に備えるため、過去の販売実績を基準とした返品予測高に対する損失見込額を計上しております。

⑤ 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支給に備えるため、役員退職慰労金規程（内規）に基づく期末要支給額を計上しております。

なお、当社は平成18年3月31日付で役員退職慰労金制度を廃止しており、当連結会計年度末の役員退職慰労引当金残高は、制度廃止時に在任していた役員に対する当社所定の基準による打切支給予定額であり、支給時期はそれぞれの役員の退任時としております。

⑥ 役員株式給付引当金

役員株式給付規程（内規）に基づく役員に対する当社株式の給付に備えるため、当連結会計年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しております。

(4) 退職給付に係る会計処理の方法

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当連結会計年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間の一定の年数（15年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各連結会計年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間の一定の年数（15年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌連結会計年度から費用処理しております。

(5) のれんの償却方法及び償却期間

のれんの償却については、5年間の定額法により償却を行っております。

(6) 連結キャッシュ・フロー計算書における資金の範囲

手許現金、随時引き出し可能な預金及び容易に換金可能であり、かつ、価値の変動について僅少なリスクしか負わない取得日から3ヶ月以内に償還期限の到来する短期投資からなっております。

(7) その他連結財務諸表作成のための重要な事項

消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

(有形固定資産の減価償却方法の変更)

当社及び国内連結子会社は、従来、有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却方法について、主として定率法を採用していましたが、当連結会計年度より定額法に変更しております。

当社グループでは、近年、主力事業であった住宅地図帳などの出版物の販売から、地図データ配信に係る定額サービスへの比重が高まっており、また、当連結会計年度において時空間情報システムによる地図データベースの整備を開始したことに伴い、より効率的な地図データの制作が可能となっております。

これらを契機に、固定資産の使用実態を検討した結果、今後は有形固定資産が耐用年数にわたり安定的に使用されるものと見込まれることから、均等償却により費用配分を行うことが有形固定資産の使用実態をより適切に反映できるため、減価償却方法を定額法に変更することが合理的であると判断いたしました。

これにより、従来の方と比べて、当連結会計年度の営業利益が125百万円、経常利益及び税金等調整前当期純利益がそれぞれ125百万円増加しております。

(表示方法の変更)

(連結貸借対照表関係)

「前受金」

前連結会計年度において、「流動負債」の「その他」に含めておりました「前受金」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することといたしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結貸借対照表において、「流動負債」の「その他」に表示していた4,102百万円は、「前受金」2,313百万円、「その他」1,788百万円として組み替えております。

(連結損益計算書関係)

1 「保険配当金」

前連結会計年度において、「営業外収益」の「その他」に含めておりました「保険配当金」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することといたしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外収益」の「その他」に表示していた158百万円は、「保険配当金」34百万円、「その他」124百万円として組み替えております。

2 「リース解約損」

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「営業外費用」の「リース解約損」は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度においては「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結損益計算書において、「営業外費用」の「リース解約損」に表示していた10百万円は、「その他」として組み替えております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

1 「前受金の増減額 (△は減少)」

前連結会計年度において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めておりました「前受金の増減額 (△は減少)」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することといたしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「営業活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた758百万円は、「前受金の増減額 (△は減少)」1,080百万円、「その他」△321百万円として組み替えております。

2 「短期借入金の純増減額 (△は減少)」

前連結会計年度において、区分掲記しておりました「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「短期借入金の純増減額 (△は減少)」は、金額的重要性が乏しくなったため、当連結会計年度においては「その他」に含めて表示しております。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「短期借入金の純増減額 (△は減少)」に表示していた△2,180百万円は、「その他」として組み替えております。

3 「自己株式の取得による支出」

前連結会計年度において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に含めておりました「自己株式の取得による支出」は、金額的重要性が増したため、当連結会計年度より区分掲記することといたしました。この表示方法の変更を反映させるため、前連結会計年度の連結財務諸表の組替えを行っております。

この結果、前連結会計年度の連結キャッシュ・フロー計算書において、「財務活動によるキャッシュ・フロー」の「その他」に表示していた△8百万円は、「自己株式の取得による支出」△2百万円、「その他」△5百万円として組み替えております。

(追加情報)

(従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引)

1. 役員株式給付信託 (BBT)

当社は、平成28年6月17日開催の第56回定時株主総会決議に基づき、平成28年9月8日より、当社取締役に対する株式報酬制度(以下「本制度」という。)を導入しております。

(1) 取引の概要

本制度の導入に際し制定した「役員株式給付規程」に基づき、当社取締役に対してポイントを付与し、退任時に当該付与ポイントに相当する当社株式を給付する仕組みであります。

将来給付する株式を予め取得するために、当社は「役員株式給付信託(BBT)」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社(信託E口)に金銭を信託し、当該信託銀行はその信託された金銭により当社株式を取得いたします。

(2) 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当連結会計年度181百万円、100千株であります。

(3) 総額法の適用により計上された借入金の帳簿価額

該当事項はありません。

2. 従業員株式給付信託 (J-E S O P)

当社は、平成29年2月21日開催の取締役会決議に基づき、平成29年3月9日より、従業員に対して自社の株式を給付するインセンティブプラン(以下「本プラン」という。)を導入しております。

(1) 取引の概要

本プランの導入に際し制定した「株式給付規程」に基づき、一定の要件を満たした当社の従業員に対し当社株式を給付する仕組みであります。

将来給付する株式を予め取得するために、当社は「従業員株式給付信託(J-E S O P)」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社(信託E口)に金銭を信託し、当該信託銀行はその信託された金銭により当社株式を取得いたします。

(2) 信託に残存する自社の株式

信託に残存する当社株式を、信託における帳簿価額(付随費用の金額を除く。)により純資産の部に自己株式として計上しております。当該自己株式の帳簿価額及び株式数は、当連結会計年度329百万円、150千株であります。

(3) 総額法の適用により計上された借入金の帳簿価額

該当事項はありません。

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」(企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日)を当連結会計年度から適用しております。

(連結貸借対照表関係)

※1 担保資産

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
現金及び預金	1百万円	1百万円
投資その他の資産 その他	0	—
計	1百万円	1百万円

なお、当該担保資産は、在外子会社の事務所家賃及び在外支店の納税番号登録の保証に供しております。

※2 関連会社に対するものは、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
投資有価証券（株式）	532百万円	684百万円

※3 商品及び製品より直接控除している単行本在庫調整引当金の額

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
商品及び製品	412百万円	386百万円

※4 有形固定資産の減価償却累計額

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
	12,413百万円	11,178百万円

(連結損益計算書関係)

※1 一般管理費に含まれる研究開発費の総額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
	400百万円	462百万円

※2 固定資産売却益の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
機械装置及び運搬具	一百万円	1百万円
その他	0	0
計	0百万円	1百万円

※3 固定資産除売却損の内容は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
建物及び構築物	1百万円	23百万円
機械装置及び運搬具	0	19
土地	—	0
リース資産（有形）	4	6
ソフトウェア	193	79
その他	17	52
計	217百万円	181百万円

※ 4 減損損失

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

当社グループは次の資産グループについて減損損失を計上いたしました。

用途（場所）	種類	減損損失 （百万円）
事業用資産 （福岡県北九州市）	その他（ソフトウェア仮勘定）	15
遊休資産 （福岡県北九州市）	建物等	28
遊休資産 （広島県江田島市他）	土地	0
－ （シンガポール）	のれん	165
合計		209

当社グループは、事業用資産については主に管理会計上の事業区分に基づき、遊休資産については個別物件毎にグルーピングしております。

当連結会計年度において減損の要否の判定を行い、投資額の回収が見込まれていない事業用資産について、帳簿価額の全額を減損損失として特別損失に計上しております。

将来の使用が見込まれていない遊休資産については、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、遊休資産に係る回収可能価額は、建物等については使用価値を零とし、土地については固定資産税評価額に基づく正味売却価額により算定しております。

また、当社の連結子会社であるINFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD. 及び同社のインド子会社において、当初計画していた収益の獲得が見込めなくなったため、のれんの全額を減損損失として特別損失に計上しております。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

当社グループは次の資産グループについて減損損失を計上いたしました。

用途（場所）	種類	減損損失 （百万円）
事業用資産 （福岡県北九州市）	ソフトウェア	119
遊休資産 （広島県江田島市）	土地	0
合計		120

当社グループは、事業用資産については主に管理会計上の事業区分に基づき、遊休資産については個別物件毎にグルーピングしております。

当連結会計年度において減損の要否の判定を行い、投資額の回収が見込まれていない事業用資産について、帳簿価額の全額を減損損失として特別損失に計上しております。

将来の使用が見込まれていない遊休資産については、帳簿価額を回収可能価額まで減額し、当該減少額を減損損失として特別損失に計上しております。なお、遊休資産に係る回収可能価額は、土地については固定資産税評価額に基づく正味売却価額により算定しております。

(連結包括利益計算書関係)

※ その他の包括利益に係る組替調整額及び税効果額

	前連結会計年度 (自 平成27年 4 月 1 日 至 平成28年 3 月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年 4 月 1 日 至 平成29年 3 月31日)
その他有価証券評価差額金：		
当期発生額	△96百万円	102百万円
組替調整額	3	0
税効果調整前	△93	102
税効果額	△34	△17
その他有価証券評価差額金	△127	85
為替換算調整勘定：		
当期発生額	△117	△28
組替調整額	△31	4
税効果調整前	△148	△23
税効果額	—	—
為替換算調整勘定	△148	△23
退職給付に係る調整額：		
当期発生額	△693	869
組替調整額	△63	△43
税効果調整前	△757	825
税効果額	255	△251
退職給付に係る調整額	△501	573
持分法適用会社に対する持分相当額：		
当期発生額	△70	47
その他の包括利益合計	△847百万円	683百万円

(連結株主資本等変動計算書関係)

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（千株）	当連結会計年度増加 株式数（千株）	当連結会計年度減少 株式数（千株）	当連結会計年度末 株式数（千株）
発行済株式				
普通株式	38,200	—	—	38,200
自己株式				
普通株式（注）1, 2	2,137	1	625	1,513

(注) 1 普通株式の自己株式の増加1千株は、単元未満株式の買取請求に基づく取得であります。

2 普通株式の自己株式の減少625千株は、取締役会決議に基づく株式会社カカコムを割当先とする自己株式183千株の処分、株式会社リクルートホールディングスを割当先とする自己株式152千株の処分、大日本印刷株式会社を割当先とする自己株式190千株の処分及び株式会社博報堂を割当先とする自己株式97千株の処分であります。

2. 配当に関する事項

(1) 配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成27年6月18日 定時株主総会	普通株式	577	16.0	平成27年3月31日	平成27年6月19日
平成27年10月30日 取締役会	普通株式	564	15.5	平成27年9月30日	平成27年12月2日

(2) 基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 (百万円)	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成28年6月17日 定時株主総会	普通株式	623	利益剰余金	17.0	平成28年3月31日	平成28年6月20日

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 発行済株式の種類及び総数並びに自己株式の種類及び株式数に関する事項

	当連結会計年度期首 株式数（千株）	当連結会計年度増加 株式数（千株）	当連結会計年度減少 株式数（千株）	当連結会計年度末 株式数（千株）
発行済株式				
普通株式	38,200	—	—	38,200
自己株式				
普通株式（注）1, 2, 3	1,513	250	250	1,514

- （注）1 当連結会計年度末の自己株式のうち、「役員株式給付信託（ＢＢＴ）」及び「従業員株式給付信託（Ｊ－ＥＳＯＰ）」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社（信託Ｅ口）が保有する株式数は、250千株であります。
- 2 普通株式の自己株式の増加250千株は、資産管理サービス信託銀行株式会社（信託Ｅ口）による当社株式の取得による増加250千株、単元未満株式の買取請求に基づく取得による増加0千株であります。
- 3 普通株式の自己株式の減少250千株は、資産管理サービス信託銀行株式会社（信託Ｅ口）への当社株式の処分による減少250千株、単元未満株式の売渡請求に基づく売却による減少0千株であります。

2. 配当に関する事項

（1）配当金支払額

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成28年6月17日 定時株主総会	普通株式	623	17.0	平成28年3月31日	平成28年6月20日
平成28年10月28日 取締役会	普通株式	625	17.0	平成28年9月30日	平成28年12月2日

- （注）平成28年10月28日取締役会決議による配当金の総額には、「役員株式給付信託（ＢＢＴ）」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社（信託Ｅ口）が保有する当社株式に対する配当金1百万円が含まれております。

（2）基準日が当連結会計年度に属する配当のうち、配当の効力発生日が翌連結会計年度となるもの

決議	株式の種類	配当金の総額 （百万円）	配当の原資	1株当たり 配当額（円）	基準日	効力発生日
平成29年6月16日 定時株主総会	普通株式	646	利益剰余金	17.5	平成29年3月31日	平成29年6月19日

- （注）平成29年6月16日定時株主総会決議による配当金の総額には、「役員株式給付信託（ＢＢＴ）」及び「従業員株式給付信託（Ｊ－ＥＳＯＰ）」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社（信託Ｅ口）が保有する当社株式に対する配当金4百万円が含まれております。

(連結キャッシュ・フロー計算書関係)

※1 現金及び現金同等物の期末残高と連結貸借対照表に掲記されている科目の金額との関係

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
現金及び預金勘定	5,105百万円	6,824百万円
預入期間が3か月を超える 定期預金	△6	△6
現金及び現金同等物	5,099百万円	6,817百万円

※2 株式の取得により新たに連結子会社となった会社の資産及び負債の主な内訳

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

株式の取得により新たに株式会社ゼンリンジオインテリジェンスを連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得価額と株式取得のための支出（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	75百万円
固定資産	62
のれん	155
流動負債	△92
固定負債	△24
新規連結子会社株式の取得価額	177
新規連結子会社の現金及び現金同等物	△1
差引：新規連結子会社取得のための支出	175百万円

株式の取得により新たにAbalta Technologies, Inc. 及びAbalta Technologies EOODを連結したことに伴う連結開始時の資産及び負債の内訳並びに株式の取得価額と株式取得のための支出（純額）との関係は次のとおりであります。

流動資産	137百万円
固定資産	33
のれん	797
流動負債	△70
為替換算調整勘定	△2
非支配株主持分	△29
新規連結子会社株式の取得価額	866
新規連結子会社の現金及び現金同等物	△15
株式取得に係る未払金及び長期未払金	△216
差引：新規連結子会社取得のための支出	634百万円

なお、前連結会計年度については、該当事項はありません。

※3 株式の売却により連結子会社でなくなった会社の資産及び負債の主な内訳

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

株式の一部売却によりINFOTRACK TELEMATICS PTE. LTD. 及びINFOTRACK TELEMATICS PRIVATE LIMITEDが連結子会社でなくなったことに伴う売却時の資産及び負債の内訳並びに株式の売却価額と売却による収入は次のとおりであります。

流動資産	142百万円
固定資産	128
流動負債	△123
固定負債	△17
為替換算調整勘定	6
非支配株主持分	△45
株式売却後の投資勘定	△58
その他	2
株式売却損	△4
連結除外会社株式の売却価額	32
連結除外会社の現金及び現金同等物	△11
差引：売却による収入	20百万円

なお、前連結会計年度については、該当事項はありません。

4 重要な非資金取引の内容

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

当連結会計年度に当社の連結子会社であります㈱ゼンリンデータコムの株式を追加取得いたしました。この取引において対価の一部として自己株式を交付したことに伴い、資本剰余金及び自己株式が次のとおり増減しております。

資本剰余金の増加額	318百万円
自己株式の減少額	587百万円

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

該当事項はありません。

(リース取引関係)

1. ファイナンス・リース取引

所有権移転外ファイナンス・リース取引

(1) リース資産の内容

① 有形固定資産

主として、一般印刷関連事業における印刷機及び地図データベース関連事業におけるサーバーであります。

② 無形固定資産

ソフトウェアであります。

(2) リース資産の減価償却の方法

連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項「4. 会計方針に関する事項 (2) 重要な減価償却資産の減価償却の方法」に記載のとおりであります。

2. オペレーティング・リース取引

オペレーティング・リース取引のうち解約不能のものに係る未経過リース料

(単位：百万円)

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
1 年内	7	2
1 年超	3	0
合計	10	3

(金融商品関係)

1. 金融商品の状況に関する事項

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、事業活動の維持拡大に必要な資金については銀行等金融機関からの借入により調達しており、一時的な余資は短期的な預金等に限定して運用しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されております。

なお、当社グループのデータ配信に関する売上高は、特定の通信事業者に対する割合が高く、カーナビゲーション用データの売上高は、カーメーカー関連各社に集中しており、これらの営業債権は、当連結会計年度末現在における受取手形及び売掛金、電子記録債権の44.0%を占めております。

有価証券及び投資有価証券は主として株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

買掛金は短期の営業債務であり、短期借入金の使途は主に運転資金であります。また、長期借入金の使途は主に設備投資資金であり、その返済日は最長で決算日後3年以内であります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

顧客の信用リスクの管理は、与信管理規程に沿ってリスク低減を図っており、市場価格の変動リスクの管理は、上場株式について四半期ごとに時価や発行体（取引先企業）の財務状況等の把握を行っております。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

(1) 金融商品に対する取組方針

当社グループは、事業活動の維持拡大に必要な資金については銀行等金融機関からの借入により調達しており、一時的な余資は短期的な預金等に限定して運用しております。

(2) 金融商品の内容及びそのリスク

営業債権である受取手形及び売掛金、電子記録債権は、顧客の信用リスクに晒されております。

なお、当社グループのデータ配信に関する売上高は、特定の通信事業者に対する割合が高く、カーナビゲーション用データの売上高は、カーメーカー関連各社に集中しており、これらの営業債権は、当連結会計年度末現在における受取手形及び売掛金、電子記録債権の49.6%を占めております。

投資有価証券は主として株式であり、市場価格の変動リスクに晒されております。

買掛金は短期の営業債務であり、短期借入金の使途は主に運転資金であります。また、長期借入金の使途は主に設備及びM&Aの投資資金であり、その返済日は最長で決算日後5年以内であります。

(3) 金融商品に係るリスク管理体制

顧客の信用リスクの管理は、与信管理規程に沿ってリスク低減を図っており、市場価格の変動リスクの管理は、上場株式について四半期ごとに時価や発行体（取引先企業）の財務状況等の把握を行っております。

2. 金融商品の時価等に関する事項

連結貸借対照表計上額、時価及びこれらの差額については、次のとおりであります。なお、時価を把握することが極めて困難と認められるものは含まれておりません（（注）2. 参照）。

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価（百万円）	差額（百万円）
(1) 現金及び預金	5,105	5,105	—
(2) 受取手形及び売掛金	12,806	12,806	—
(3) 電子記録債権	68	68	—
(4) 有価証券及び投資有価証券	2,194	2,194	—
資産計	20,174	20,174	—
(1) 買掛金	2,875	2,875	—
(2) 短期借入金	1,767	1,767	—
(3) 未払法人税等	951	951	—
(4) 長期借入金※	1,732	1,738	6
負債計	7,326	7,332	6

※ 1年以内に返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めております。

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	連結貸借対照表計上額 (百万円)	時価（百万円）	差額（百万円）
(1) 現金及び預金	6,824	6,824	—
(2) 受取手形及び売掛金	14,475	14,475	—
(3) 電子記録債権	87	87	—
(4) 投資有価証券	2,326	2,326	—
資産計	23,714	23,714	—
(1) 買掛金	2,555	2,555	—
(2) 短期借入金	1,700	1,700	—
(3) 未払法人税等	1,896	1,896	—
(4) 長期借入金※	1,844	1,847	2
負債計	7,996	7,999	2

※ 1年以内に返済予定の長期借入金は、長期借入金に含めております。

(注) 1. 金融商品の時価の算定方法及び有価証券に関する事項

資 産

(1) 現金及び預金、(2) 受取手形及び売掛金、(3) 電子記録債権

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 投資有価証券

これらの時価について、株式は取引所の価格によっております。また、保有目的ごとの有価証券に関する事項については、注記事項「有価証券関係」をご参照ください。

負 債

(1) 買掛金、(2) 短期借入金、(3) 未払法人税等

これらは短期間で決済されるものであるため、時価は帳簿価額と近似していることから、当該帳簿価額によっております。

(4) 長期借入金

長期借入金の時価は、元利金の合計額を、同様の新規借入を行った場合に想定される利率で割り引いた現在価値により算定しております。

2. 時価を把握することが極めて困難と認められる金融商品

(単位：百万円)

区分	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
私募債	0	0
関連会社株式	532	684
非上場株式	695	682
転換社債型新株予約権付社債	—	32
投資事業組合への出資	12	24
合計	1,240	1,423

これらについては、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、「(4) 投資有価証券」には含めておりません。

3. 金銭債権及び満期のある有価証券の連結決算日後の償還予定額

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	5,105	—	—	—
受取手形及び売掛金	12,806	—	—	—
電子記録債権	68	—	—	—
合計	17,980	—	—	—

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 5年以内 (百万円)	5年超 10年以内 (百万円)	10年超 (百万円)
現金及び預金	6,824	—	—	—
受取手形及び売掛金	14,475	—	—	—
電子記録債権	87	—	—	—
投資有価証券				
その他有価証券のうち満期があるもの				
転換社債型新株予約権付社債	—	32	—	—
合計	21,388	32	—	—

4. 長期借入金及びその他の有利子負債の連結決算日後の返済予定額

前連結会計年度（平成28年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	1,767	—	—	—	—	—
長期借入金	387	1,179	165	—	—	—
合計	2,154	1,179	165	—	—	—

当連結会計年度（平成29年3月31日）

	1年以内 (百万円)	1年超 2年以内 (百万円)	2年超 3年以内 (百万円)	3年超 4年以内 (百万円)	4年超 5年以内 (百万円)	5年超 (百万円)
短期借入金	1,700	—	—	—	—	—
長期借入金	1,179	165	—	—	500	—
合計	2,879	165	—	—	500	—

(有価証券関係)

1. その他有価証券

前連結会計年度 (平成28年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	1,807	1,017	789
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	387	600	△213
合計		2,194	1,618	576

(注) 私募債 (連結貸借対照表計上額0百万円)、非上場株式 (連結貸借対照表計上額695百万円)、投資事業組合への出資 (連結貸借対照表計上額12百万円) は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

当連結会計年度 (平成29年3月31日)

	種類	連結貸借対照表 計上額 (百万円)	取得原価 (百万円)	差額 (百万円)
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えるもの	株式	1,674	769	904
連結貸借対照表計上額が 取得原価を超えないもの	株式	651	875	△223
合計		2,326	1,645	681

(注) 私募債 (連結貸借対照表計上額0百万円)、非上場株式 (連結貸借対照表計上額682百万円)、転換社債型新株予約権付社債 (連結貸借対照表計上額32百万円)、投資事業組合への出資 (連結貸借対照表計上額24百万円) は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、上表の「その他有価証券」には含めておりません。

2. 連結会計年度中に売却したその他有価証券

前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	9	6	—

当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

種類	売却額 (百万円)	売却益の合計額 (百万円)	売却損の合計額 (百万円)
株式	22	12	△0

3. 減損処理を行った有価証券

前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)

有価証券について10百万円 (その他有価証券で、時価のある株式3百万円、時価評価されていない非上場株式4百万円、私募債2百万円) 減損処理しております。

当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)

有価証券について3百万円 (その他有価証券で時価評価されていない非上場株式3百万円) 減損処理しております。

なお、当社グループは投資価値の下落が一時的でなく、かつ、回復可能性がないと判断した場合、評価損を計上しております。その判断は、帳簿価額を下回った期間の長さ及び下落幅、当該会社の財務状況及び将来の事業計画等に基づき総合的に検討しております。

(退職給付関係)

1. 採用している退職給付制度の概要

(1) 提出会社

確定給付型の制度として企業年金基金制度（ゼンリン企業年金基金、平成16年2月1日移行）及び退職一時金制度を採用しております。また、確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度（平成26年12月1日移行）を採用しております。

また、従業員の退職等に際して、退職給付会計に準拠した数理計算による退職給付債務の対象とされない割増退職金を支払う場合があります。

なお、提出会社は、企業年金基金制度に退職給付信託を設定しております。

(2) 国内連結子会社

提出会社と同じ確定給付型の制度として企業年金基金制度（ゼンリン企業年金基金）及び退職一時金制度を採用し、また確定拠出型の制度として、確定拠出年金制度を採用している会社は2社あります。

また、確定給付型の退職一時金制度又は企業年金基金制度を採用している会社は3社あり、そのうち総合設立型厚生年金基金に加入している会社は1社あり、自社の拠出に対応する年金資産の額を合理的に計算することができないため、確定拠出制度と同様に会計処理しております。当該総合設立型厚生年金基金につきましては、平成28年9月2日付で厚生労働大臣の認可を受けて解散いたしました。なお、当基金の解散による追加負担額の発生は見込まれておりません。

確定拠出年金制度のみ採用している会社は1社あり、その外3社は退職金制度を採用しておりません。

(3) 海外連結子会社

確定拠出型の制度を採用している会社は1社あり、その外4社は退職金制度を採用しておりません。

2. 確定給付制度

(1) 退職給付債務の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
退職給付債務の期首残高	5,864百万円	6,351百万円
勤務費用	408	434
利息費用	22	△2
数理計算上の差異の発生額	348	△56
退職給付の支払額	△292	△299
その他	—	△4
退職給付債務の期末残高	6,351百万円	6,423百万円

(注) 簡便法を採用した制度を含んでおります。

(2) 年金資産の期首残高と期末残高の調整表

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
年金資産の期首残高	8,930百万円	8,771百万円
期待運用収益	190	182
数理計算上の差異の発生額	△345	813
事業主からの拠出額	267	263
退職給付の支払額	△272	△278
その他	△0	△0
年金資産の期末残高	8,771百万円	9,751百万円

- (3) 退職給付債務及び年金資産の期末残高と連結貸借対照表に計上された退職給付に係る負債及び退職給付に係る資産の調整表

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
積立型制度の退職給付債務	6,146百万円	6,218百万円
年金資産	△8,771	△9,751
	△2,624	△3,532
非積立型制度の退職給付債務	204	204
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△2,419百万円	△3,328百万円
退職給付に係る負債	237百万円	238百万円
退職給付に係る資産	△2,657	△3,566
連結貸借対照表に計上された負債と資産の純額	△2,419百万円	△3,328百万円

(注) 簡便法を採用した制度を含んでおります。

- (4) 退職給付費用及びその内訳項目の金額

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
勤務費用 (注)	408百万円	434百万円
利息費用	22	△2
期待運用収益	△190	△182
数理計算上の差異の費用処理額	68	97
過去勤務費用の費用処理額	△131	△141
その他	44	22
確定給付制度に係る退職給付費用	221百万円	228百万円

(注) 簡便法で計算した退職給付費用は勤務費用に含めております。

- (5) 退職給付に係る調整額

退職給付に係る調整額に計上した項目 (税効果控除前) の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
過去勤務費用	131百万円	141百万円
数理計算上の差異	625	△966
合 計	757百万円	△825百万円

- (6) 退職給付に係る調整累計額

退職給付に係る調整累計額に計上した項目 (税効果控除前) の内訳は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
未認識過去勤務費用	△1,195百万円	△1,054百万円
未認識数理計算上の差異	587	△378
合 計	△607百万円	△1,433百万円

(7) 年金資産に関する事項

① 年金資産の主な内訳

年金資産合計に対する主な分類ごとの比率は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
株式	54%	56%
債券	27	24
一般勘定	10	8
その他	9	12
合 計	100%	100%

(注) 年金資産合計には、企業年金制度に対して設定した退職給付信託が前連結会計年度17%、当連結会計年度21%含まれております。

② 長期期待運用収益率の設定方法

年金資産の長期期待運用収益率を決定するため、現在及び予想される年金資産の配分と、年金資産を構成する多様な資産からの現在及び将来期待される長期の収益率を考慮しております。

(8) 数理計算上の計算基礎に関する事項

主要な数理計算上の計算基礎

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
割引率	△0.0%	0.0%
	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
長期期待運用収益率	2.5%	2.5%

(注) 予想昇給率は退職給付債務の計算に使用しておりませんので、記載を省略しております。

3. 確定拠出制度

当社及び連結子会社の確定拠出制度（確定拠出制度と同様に会計処理する、複数事業主制度の厚生年金基金制度を含む。）への要拠出額は、前連結会計年度264百万円、当連結会計年度264百万円であります。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
たな卸資産評価損	650百万円	884百万円
償却限度超過額	602	642
投資有価証券等評価損	237	221
貸倒引当金	35	50
賞与引当金	572	768
退職給付に係る負債	77	77
連結子会社繰越欠損金	149	68
その他	688	750
繰延税金資産小計	3,014百万円	3,463百万円
評価性引当額	△461	△440
繰延税金資産合計	2,552百万円	3,023百万円
繰延税金負債		
退職給付に係る資産	△491百万円	△762百万円
固定資産圧縮積立金	△110	△102
その他有価証券評価差額金	△214	△231
その他	△10	△1
繰延税金負債合計	△827百万円	△1,098百万円
繰延税金資産（負債）の純額	1,724百万円	1,925百万円

(注) 繰延税金資産の純額は、連結貸借対照表の次の項目に含まれております。

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
流動資産－繰延税金資産	1,543百万円	2,045百万円
固定資産－繰延税金資産	284百万円	185百万円
流動負債－繰延税金負債	△0百万円	△2百万円
固定負債－繰延税金負債	△102百万円	△303百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前連結会計年度 (平成28年3月31日)	当連結会計年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率	32.8%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	3.3	4.2
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△16.1	△6.7
住民税均等割	3.3	2.3
未実現利益の消去等連結修正項目	15.2	8.7
評価性引当額の増減	3.8	0.3
連結子会社との税率差異	1.2	0.9
外国税額控除等の税額控除項目	△0.5	△0.6
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	4.3	—
その他	△0.4	0.3
税効果会計適用後の法人税等の負担率	46.9%	40.0%

(企業結合等関係)

(取得による企業結合)

(株)ゼンリンジオインテリジェンス

1. 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 (株)JPSマーケティング

事業の内容 GISマーケティング コンサルティング業務、GIS・マーケティングコンテンツの研究開発及び販売

(2) 企業結合を行った主な理由

GISマーケティング事業を展開する同社が保有するノウハウ及び各種コンテンツの強みを活かし、当社グループのGIS事業の強化を図ることを目的としております。

(3) 企業結合日

平成28年4月1日

(4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

(5) 結合後企業の名称

(株)ゼンリンジオインテリジェンス

(6) 取得した議決権比率

100.0%

(7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が、現金を対価として株式を取得したためであります。

2. 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

平成28年4月1日から平成29年3月31日まで

3. 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金	177百万円
取得原価		177百万円

4. 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザリー費用等 4百万円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

(1) 発生したのれんの金額

155百万円

(2) 発生原因

今後の事業展開により期待される将来の超過収益力であります。

(3) 償却方法及び償却期間

5年間にわたる均等償却

6. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	75百万円
固定資産	62
資産合計	138百万円
流動負債	92百万円
固定負債	24
負債合計	116百万円

1. 企業結合の概要

(1) 被取得企業の名称及びその事業の内容

被取得企業の名称 Abalta Technologies, Inc.

なお、被取得企業の株式取得に伴い、同社の子会社であるAbalta Technologies EOODについても、当社の子会社となります。

事業の内容 車載向けソフトウェア・ソリューション・位置情報ソフトウェアのライセンス及び受託開発

(2) 企業結合を行った主な理由

これまで国内外で培ったカーナビゲーション向け地図データ整備やコンテンツ整備のノウハウに加え、車載ソフトウェアを組み合わせたソリューション提供により、海外事業を中心とした事業強化を目的としております。

(3) 企業結合日

平成28年9月12日

(4) 企業結合の法的形式

現金を対価とする株式取得

(5) 結合後企業の名称

名称の変更はありません。

(6) 取得した議決権比率

75.0%

(7) 取得企業を決定するに至った主な根拠

当社が、現金を対価として株式を取得したためであります。

2. 連結財務諸表に含まれている被取得企業の業績の期間

平成28年6月30日をみなし取得日としており、かつ、当該被取得企業については、平成28年12月31日現在の財務諸表を基礎として連結決算を行っているため、平成28年7月1日から平成28年12月31日までの業績が含まれております。

3. 被取得企業の取得原価及び対価の種類ごとの内訳

取得の対価	現金(未払金を含む)	866百万円
取得原価		866百万円

4. 主要な取得関連費用の内容及び金額

アドバイザリー費用等 115百万円

5. 発生したのれんの金額、発生原因、償却方法及び償却期間

(1) 発生したのれんの金額

797百万円

(2) 発生原因

今後の事業展開により期待される将来の超過収益力であります。

(3) 償却方法及び償却期間

5年間にわたる均等償却

6. 企業結合日に受け入れた資産及び引き受けた負債の額並びにその主な内訳

流動資産	137百万円
固定資産	33
資産合計	170百万円
流動負債	70百万円
負債合計	70百万円

7. 企業結合契約に規定される条件付取得対価の内容及び当連結会計年度以降の会計処理方針

(1) 条件付取得対価の内容

クロージング後の特定事業年度における業績等の達成水準に応じて、条件付取得対価を追加で支払うこととなっております。

(2) 当連結会計年度以降の会計処理方針

取得対価の追加支払が発生した場合には、取得時に支払ったものとみなして取得原価を修正し、のれんの金額及びのれんの償却額を修正することとしております。

8. 企業結合が連結会計年度の開始の日に完了したと仮定した場合の当連結会計年度の連結損益計算書に及ぼす影響の概算額及びその算定方法

売上高	270百万円
営業損失（△）	△103百万円
経常損失（△）	△102百万円
税金等調整前当期純損失（△）	△108百万円
親会社株主に帰属する当期純損失（△）	△104百万円
1株当たり当期純損失（△）	△2円84銭

（概算額の算定方法）

企業結合が当連結会計年度開始の日に完了したと仮定して算定された売上高及び損益情報と、取得企業の連結損益計算書における売上高及び損益情報との差額を、影響の概算額としております。

なお、当該注記は監査証明を受けておりません。

(セグメント情報等)

【セグメント情報】

1. 報告セグメントの概要

当社グループの報告セグメントは、当社グループの構成単位のうち分離された財務情報が入手可能であり、当社の取締役会が、経営資源の配分の決定及び業績を評価するために、定期的に検討を行う対象となっているものです。

当社グループは、主に地図データベースに係る製品を外部顧客に販売するにあたり、当社及び子会社各社にて生産（調査・入力編集・加工等）及び販売（物販・配信等）を分担し、1つの地図データベース関連事業を営んでおり、そのほかにも、商業印刷物の企画・デザイン及び製造・販売を行う一般印刷関連事業などを営んでおります。

したがって、当社グループは、「地図データベース関連事業」及び「一般印刷関連事業」を報告セグメントとし、それ以外の事業は「その他」に区分しております。

「地図データベース関連事業」は、住宅地図帳、応用地図、住宅地図データベース、インターネットサービス向け地図データ及びカーナビゲーション用データ等の製造・販売、並びにスマートフォン向けサービスの提供を行っており、「一般印刷関連事業」は、一般印刷物を製造・販売しております。

2. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額の算定方法

報告されている事業セグメントの会計処理の方法は、「連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項」における記載と概ね同一であります。

報告セグメントの利益は、営業利益ベースの数値であります。

セグメント間の内部収益及び振替高は市場実勢価格に基づいております。

(有形固定資産の減価償却方法の変更)

「会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更」に記載のとおり、当社及び国内連結子会社は、従来、有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却方法について、主として定率法を採用していましたが、当連結会計年度より定額法に変更しております。

これにより、従来の方と比べて、当連結会計年度のセグメント利益が、それぞれ「地図データベース関連事業」で111百万円、「一般印刷関連事業」で11百万円、「その他」で2百万円増加しております。

3. 報告セグメントごとの売上高、利益又は損失、資産、負債その他の項目の金額に関する情報

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

(単位：百万円)

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	地図データベース 関連事業	一般印刷 関連事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	46,140	3,649	49,790	5,179	54,970
セグメント間の内部売上高 又は振替高	85	549	635	104	739
計	46,226	4,199	50,425	5,283	55,709
セグメント利益又は損失(△)	2,571	82	2,653	294	2,947
セグメント資産	42,266	4,701	46,967	2,215	49,182
その他の項目					
減価償却費	4,899	160	5,060	46	5,106
のれんの償却額	83	—	83	230	314
持分法適用会社への投資額	532	—	532	—	532
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	5,278	265	5,543	32	5,575

(注) 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない仕入商品販売及びダイレクトメール発送代行などの事業活動を含んでおります。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	報告セグメント			その他 (注)	合計
	地図データベース関連事業	一般印刷関連事業	計		
売上高					
外部顧客への売上高	49,092	3,503	52,596	5,222	57,819
セグメント間の内部売上高 又は振替高	104	643	748	297	1,046
計	49,197	4,147	53,345	5,520	58,865
セグメント利益又は損失(△)	3,836	56	3,893	256	4,149
セグメント資産	44,645	5,350	49,995	2,097	52,093
その他の項目					
減価償却費	5,339	162	5,501	35	5,537
のれんの償却額	130	—	130	231	361
持分法適用会社への投資額	633	—	633	—	633
有形固定資産及び無形固定 資産の増加額	4,837	685	5,522	23	5,545

(注) 「その他」の区分は、報告セグメントに含まれない仕入商品販売及びダイレクトメール発送代行などの事業活動を含んでおります。

4. 報告セグメント合計額と連結財務諸表計上額との差額及び当該差額の主な内容（差異調整に関する事項）

（単位：百万円）

売上高	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	50,425	53,345
「その他」の区分の売上高	5,283	5,520
セグメント間取引消去	△739	△1,046
連結財務諸表の売上高	54,970	57,819

（単位：百万円）

利益	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	2,653	3,893
「その他」の区分の利益	294	256
セグメント間取引消去	90	85
連結財務諸表の営業利益	3,038	4,234

(単位：百万円)

資産	前連結会計年度	当連結会計年度
報告セグメント計	46,967	49,995
「その他」の区分の資産	2,215	2,097
全社資産（注）	10,906	13,387
セグメント間取引消去	△278	△330
連結財務諸表の資産合計	59,810	65,150

（注）全社資産は、主に報告セグメントに帰属しない余資運用資金（現金及び預金）、長期投資資金（投資有価証券）、管理部門に係る資産等であります。

(単位：百万円)

その他の 項目	報告セグメント計		その他		調整額		連結財務諸表計上額	
	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度	前連結 会計年度	当連結 会計年度
減価償却費	5,060	5,501	46	35	74	53	5,181	5,591
のれんの 償却額	83	130	230	231	—	—	314	361
持分法適用会 社への投資額	532	633	—	—	—	—	532	633
有形固定資産 及び無形固定 資産の増加額	5,543	5,522	32	23	—	17	5,575	5,563

（注）有形固定資産及び無形固定資産の増加額の調整額は、報告セグメントに帰属しない建物等の設備投資額であります。

【関連情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

報告セグメントと同一区分のため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

(単位：百万円)

顧客の名称又は氏名	売上高	関連するセグメント名
株式会社NTTドコモ	6,280	地図データベース関連事業

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

1. 製品及びサービスごとの情報

報告セグメントと同一区分のため、記載を省略しております。

2. 地域ごとの情報

(1) 売上高

本邦の外部顧客への売上高が連結損益計算書の売上高の90%を超えるため、記載を省略しております。

(2) 有形固定資産

本邦に所在している有形固定資産の金額が連結貸借対照表の有形固定資産の金額の90%を超えるため、記載を省略しております。

3. 主要な顧客ごとの情報

該当事項はありません。

【報告セグメントごとの固定資産の減損損失に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

(単位：百万円)

	地図データベース関連事業	一般印刷関連事業	その他	全社・消去	合計
減損損失	209	—	—	0	209

(注) 「全社・消去」の金額は、特定のセグメントに帰属しない全社資産に係る減損損失であります。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

(単位：百万円)

	地図データベース関連事業	一般印刷関連事業	その他	全社・消去	合計
減損損失	119	—	—	0	120

(注) 「全社・消去」の金額は、特定のセグメントに帰属しない全社資産に係る減損損失であります。

【報告セグメントごとののれんの償却額及び未償却残高に関する情報】

前連結会計年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	地図データベース関連事業	一般印刷関連事業	その他	全社・消去	合計
当期償却額	83	—	230	—	314
当期末残高	51	—	809	—	860

（注）「その他」の金額はダイレクトメール発送代行などの事業活動に係る金額であります。

当連結会計年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	地図データベース関連事業	一般印刷関連事業	その他	全社・消去	合計
当期償却額	130	—	231	—	361
当期末残高	971	—	578	—	1,549

（注）「その他」の金額はダイレクトメール発送代行などの事業活動に係る金額であります。

【報告セグメントごとの負ののれん発生益に関する情報】

該当事項はありません。

【関連当事者情報】

該当事項はありません。

(1株当たり情報)

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
1株当たり純資産額	1,094円22銭	1,146円51銭
1株当たり当期純利益	44円21銭	67円11銭

(注) 1 潜在株式調整後1株当たり当期純利益については、潜在株式が存在しないため、記載しておりません。

- 2 「役員株式給付信託（BBT）」及び「従業員株式給付信託（J-E S O P）」の信託財産として資産管理サービス信託銀行株式会社（信託E口）が保有する当社株式を、1株当たり純資産額の算定上、期末発行済株式総数から控除する自己株式に含めております（前連結会計年度 一千株、当連結会計年度 250千株）。
- また、1株当たり当期純利益の算定上、期中平均株式数の計算において控除する自己株式に含めております（前連結会計年度 一千株、当連結会計年度 65千株）。

- 3 1株当たり当期純利益の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	前連結会計年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当連結会計年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
親会社株主に帰属する当期純利益（百万円）	1,610	2,462
普通株主に帰属しない金額（百万円）	—	—
普通株式に係る親会社株主に帰属する 当期純利益（百万円）	1,610	2,462
普通株式の期中平均株式数（千株）	36,426	36,686

- 4 1株当たり純資産額の算定上の基礎は、次のとおりであります。

	前連結会計年度末 (平成28年3月31日)	当連結会計年度末 (平成29年3月31日)
純資産の部の合計額（百万円）	41,496	43,463
純資産の部の合計額から控除する金額 (百万円)	1,352	1,401
(うち非支配株主持分)	(1,352)	(1,401)
普通株式に係る期末の純資産額（百万円）	40,143	42,061
1株当たり純資産額の算定に用いられた 期末の普通株式の数（千株）	36,687	36,686

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

⑤【連結附属明細表】

【社債明細表】

該当事項はありません。

【借入金等明細表】

区分	当期首残高 (百万円)	当期末残高 (百万円)	平均利率 (%)	返済期限
短期借入金	1,767	1,700	0.10	—
1年以内に返済予定の長期借入金 (注3)	387	1,179	0.48	—
1年以内に返済予定のリース債務	759	745	—	—
長期借入金 (1年以内に返済予定のものを除く。) (注4)	1,344	665	0.30	平成33年9月30日
リース債務 (1年以内に返済予定のものを除く。) (注4)	1,311	1,489	—	平成35年1月20日
その他有利子負債	—	—	—	—
合計	5,570	5,779	—	—

(注) 1 「平均利率」については、期末借入残高に対する加重平均利率を記載しております。

2 リース債務の平均利率については、当社グループでは、主にリース料総額に含まれる利息相当額を控除する前の金額でリース債務を連結貸借対照表に計上しているため、記載しておりません。

3 1年以内に返済予定の長期借入金は、連結貸借対照表の「短期借入金」に含めて表示しております。

4 長期借入金及びリース債務（1年以内に返済予定のものを除く。）の連結決算日後5年内における返済予定額は、次のとおりであります。

	1年超2年以内 (百万円)	2年超3年以内 (百万円)	3年超4年以内 (百万円)	4年超5年以内 (百万円)
長期借入金	165	—	—	500
リース債務	605	431	305	121

【資産除去債務明細表】

当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における資産除去債務の金額が、当連結会計年度期首及び当連結会計年度末における負債及び純資産の合計額の100分の1以下であるため、連結財務諸表規則第92条の2の規定により記載を省略しております。

(2)【その他】

当連結会計年度における四半期情報等

(累計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	当連結会計年度
売上高 (百万円)	11,163	24,783	37,647	57,819
税金等調整前四半期 (当期) 純利益 (△は損失) (百万円)	△471	△268	198	4,226
親会社株主に帰属する四半期 (当期) 純利益 (△は損失) (百万円)	△406	△387	△170	2,462
1株当たり四半期 (当期) 純利益 (△は損失) (円)	△11.09	△10.57	△4.64	67.11

(会計期間)	第1四半期	第2四半期	第3四半期	第4四半期
1株当たり四半期純利益 (△は損失) (円)	△11.09	0.52	5.93	71.75

2 【財務諸表等】

(1) 【財務諸表】

① 【貸借対照表】

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
資産の部		
流動資産		
現金及び預金	1,902	※1 3,235
受取手形	59	29
売掛金	※2 8,779	※2 10,439
有価証券	3	—
商品及び製品	816	769
仕掛品	150	174
原材料及び貯蔵品	38	38
前払費用	326	405
繰延税金資産	1,291	1,725
その他	※2 177	※2 196
貸倒引当金	△9	△15
流動資産合計	13,536	16,998
固定資産		
有形固定資産		
建物	3,943	3,854
構築物	78	71
機械及び装置	15	14
車両運搬具	8	8
工具、器具及び備品	458	394
土地	3,921	3,919
リース資産	749	429
建設仮勘定	6	42
有形固定資産合計	9,181	8,734
無形固定資産		
ソフトウェア	8,142	7,864
その他	1,745	1,428
無形固定資産合計	9,888	9,293
投資その他の資産		
投資有価証券	2,759	3,222
関係会社株式	8,046	9,247
関係会社出資金	140	140
長期貸付金	6	4
繰延税金資産	235	226
その他	※1 2,999	3,142
貸倒引当金	△91	△124
投資その他の資産合計	14,096	15,859
固定資産合計	33,166	33,887
資産合計	46,703	50,885

(単位：百万円)

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
負債の部		
流動負債		
買掛金	※2 1,792	※2 1,993
短期借入金	1,380	2,079
リース債務	378	220
未払金	※2 656	※2 785
未払費用	2,869	3,678
未払法人税等	664	1,346
前受金	1,749	2,797
預り金	66	69
役員賞与引当金	59	84
その他	558	646
流動負債合計	10,176	13,702
固定負債		
長期借入金	1,344	665
リース債務	423	241
退職給付引当金	38	49
役員退職慰労引当金	55	55
役員株式給付引当金	—	22
その他	681	642
固定負債合計	2,544	1,677
負債合計	12,720	15,380
純資産の部		
株主資本		
資本金	6,557	6,557
資本剰余金		
資本準備金	13,111	13,111
その他資本剰余金	374	552
資本剰余金合計	13,485	13,663
利益剰余金		
利益準備金	485	485
その他利益剰余金		
固定資産圧縮積立金	46	45
別途積立金	10,000	10,000
繰越利益剰余金	5,111	6,523
利益剰余金合計	15,643	17,054
自己株式	△2,013	△2,192
株主資本合計	33,673	35,083
評価・換算差額等		
その他有価証券評価差額金	309	422
評価・換算差額等合計	309	422
純資産合計	33,983	35,505
負債純資産合計	46,703	50,885

②【損益計算書】

(単位：百万円)

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
売上高	※1 36,978	※1 39,348
売上原価	※1 21,895	※1 22,645
売上総利益	15,083	16,703
販売費及び一般管理費	※1, ※2 13,164	※1, ※2 13,842
営業利益	1,918	2,861
営業外収益		
受取利息及び受取配当金	※1 1,298	※1 983
その他	※1 124	※1 119
営業外収益合計	1,422	1,103
営業外費用		
支払利息	14	9
その他	19	12
営業外費用合計	34	21
経常利益	3,307	3,942
特別利益		
固定資産売却益	0	0
その他	6	0
特別利益合計	6	1
特別損失		
固定資産売却損	—	0
減損損失	44	120
その他	209	160
特別損失合計	254	281
税引前当期純利益	3,059	3,663
法人税、住民税及び事業税	848	1,459
法人税等調整額	6	△456
法人税等合計	854	1,003
当期純利益	2,204	2,659

③【株主資本等変動計算書】

前事業年度（自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本								
	資本金	資本剰余金			利益剰余金				
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金			利益剰余金合計
						固定資産 圧縮積立金	別途積立金	繰越利益 剰余金	
当期首残高	6, 557	13, 111	－	13, 111	485	47	10, 000	4, 047	14, 580
当期変動額									
固定資産圧縮積立金の 積立						1		△1	－
固定資産圧縮積立金の 取崩						△1		1	－
剰余金の配当								△1, 141	△1, 141
当期純利益								2, 204	2, 204
自己株式の取得									
自己株式の処分			374	374					
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）									
当期変動額合計	－	－	374	374	－	△0	－	1, 063	1, 063
当期末残高	6, 557	13, 111	374	13, 485	485	46	10, 000	5, 111	15, 643

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△2,842	31,407	453	453	31,860
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の積立		—			—
固定資産圧縮積立金の取崩		—			—
剰余金の配当		△1,141			△1,141
当期純利益		2,204			2,204
自己株式の取得	△2	△2			△2
自己株式の処分	831	1,205			1,205
株主資本以外の項目の当期変動額（純額）			△143	△143	△143
当期変動額合計	828	2,266	△143	△143	2,122
当期末残高	△2,013	33,673	309	309	33,983

当事業年度（自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日）

（単位：百万円）

	株主資本							
	資本金	資本剰余金			利益剰余金			
		資本準備金	その他資本剰余金	資本剰余金合計	利益準備金	その他利益剰余金		
						固定資産圧縮積立金	別途積立金	繰越利益剰余金
当期首残高	6,557	13,111	374	13,485	485	46	10,000	5,111
当期変動額								
固定資産圧縮積立金の積立								—
固定資産圧縮積立金の取崩						△1		1
剰余金の配当								△1,249
当期純利益								2,659
自己株式の取得								
自己株式の処分			177	177				
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）								
当期変動額合計	—	—	177	177	—	△1	—	1,412
当期末残高	6,557	13,111	552	13,663	485	45	10,000	6,523

	株主資本		評価・換算差額等		純資産合計
	自己株式	株主資本合計	その他有価証券 評価差額金	評価・換算差額等合計	
当期首残高	△2,013	33,673	309	309	33,983
当期変動額					
固定資産圧縮積立金の積立		—			—
固定資産圧縮積立金の取崩		—			—
剰余金の配当		△1,249			△1,249
当期純利益		2,659			2,659
自己株式の取得	△511	△511			△511
自己株式の処分	332	510			510
株主資本以外の項目の 当期変動額（純額）			112	112	112
当期変動額合計	△178	1,409	112	112	1,522
当期末残高	△2,192	35,083	422	422	35,505

【注記事項】

(重要な会計方針)

1. 有価証券の評価基準及び評価方法

(1) 子会社株式及び関連会社株式

移動平均法による原価法

(2) その他有価証券

① 時価のあるもの

期末日の市場価格等に基づく時価法（評価差額は全部純資産直入法により処理し、売却原価は移動平均法により算定）

② 時価のないもの

移動平均法による原価法

2. たな卸資産の評価基準及び評価方法

(1) 製品、仕掛品、原材料

総平均法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

(2) 商品

売価還元法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

(3) 貯蔵品

最終仕入原価法による原価法（貸借対照表価額は収益性の低下に基づく簿価切下げの方法により算定）

3. 固定資産の減価償却の方法

(1) 有形固定資産（リース資産を除く）

定額法

（主な耐用年数）

建物 15年～50年

工具、器具及び備品 3年～10年

(2) 無形固定資産（リース資産を除く）

ソフトウェア

① 市場販売目的のソフトウェア

見込販売数量に基づく償却額と3年を限度とする残存有効期間に基づく均等配分額とを比較し、いずれか大きい額を償却する方法

② 自社利用ソフトウェア

5年を限度とする利用可能期間で定額法により償却する方法

(3) リース資産

所有権移転外ファイナンス・リース取引に係るリース資産

リース期間を耐用年数とし、残存価額を零とする定額法

4. 引当金の計上基準

(1) 単行本在庫調整引当金

住宅地図帳の売れ残り書籍の評価損に備えるため、出版部数に対する一定期間の販売部数を算定基礎とした評価損失見込額を計上しております。

(2) 貸倒引当金

営業債権等の貸倒損失に備えるため、一般債権については貸倒実績率により、貸倒懸念債権等特定の債権については個別に回収可能性を検討し、回収不能見込額を計上しております。

(3) 役員賞与引当金

役員賞与の支給に備えるため、当事業年度に係る支給見込額を計上しております。

(4) 退職給付引当金

従業員の退職給付に備えるため、当事業年度末における退職給付債務及び年金資産の見込額に基づき計上しております。

① 退職給付見込額の期間帰属方法

退職給付債務の算定にあたり、退職給付見込額を当事業年度末までの期間に帰属させる方法については、給付算定式基準によっております。

② 数理計算上の差異及び過去勤務費用の費用処理方法

過去勤務費用については、その発生時における従業員の平均残存勤務期間の一定の年数（15年）による定額法により費用処理しております。

数理計算上の差異については、各事業年度の発生時における従業員の平均残存勤務期間の一定の年数（15年）による定額法により按分した額を、それぞれ発生の翌事業年度から費用処理しております。

(5) 役員退職慰労引当金

役員の退職慰労金の支給に備えるため、役員退職慰労金規程（内規）に基づく期末要支給額を計上しております。

なお、当社は平成18年3月31日付で役員退職慰労金制度を廃止しており、当事業年度末の役員退職慰労引当金残高は、制度廃止時に在任していた役員に対する当社所定の基準による打切支給予定額であり、支給時期はそれぞれの役員の退任時としております。

(6) 役員株式給付引当金

役員株式給付規程（内規）に基づく役員に対する当社株式の給付に備えるため、当事業年度末における株式給付債務の見込額に基づき計上しております。

5. その他財務諸表作成のための基本となる重要な事項

(1) 退職給付に係る会計処理

退職給付に係る未認識数理計算上の差異及び未認識過去勤務費用の未処理額の会計処理の方法は、連結財務諸表におけるこれらの会計処理の方法と異なっております。

(2) 消費税等の会計処理

税抜方式によっております。

(会計上の見積りの変更と区別することが困難な会計方針の変更)

(有形固定資産の減価償却方法の変更)

当社は、従来、有形固定資産（リース資産を除く）の減価償却方法について、主として定率法を採用していましたが、当事業年度より定額法に変更しております。

当社では、近年、主力事業であった住宅地図帳などの出版物の販売から、地図データ配信に係る定額サービスへの比重が高まっており、また、当事業年度において時空間情報システムによる地図データベースの整備を開始したことに伴い、より効率的な地図データの制作が可能となっております。

これらを契機に、固定資産の使用実態を検討した結果、今後は有形固定資産が耐用年数にわたり安定的に使用されるものと見込まれることから、均等償却により費用配分を行うことが有形固定資産の使用実態をより適切に反映できるため、減価償却方法を定額法に変更することが合理的であると判断いたしました。

これにより、従来の方と比べて、当事業年度の営業利益が99百万円、経常利益及び税引前当期純利益がそれぞれ99百万円増加しております。

(追加情報)

(従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引)

従業員等に信託を通じて自社の株式を交付する取引に関する注記については、連結財務諸表「注記事項（追加情報）」に同一の内容を記載しているため、注記を省略しております。

(繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針の適用)

「繰延税金資産の回収可能性に関する適用指針」（企業会計基準適用指針第26号 平成28年3月28日）を当事業年度から適用しております。

(貸借対照表関係)

※1 担保資産

担保に供している資産は、次のとおりであります。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
現金及び預金	一百万円	0百万円
投資その他の資産 その他	0	—
計	0百万円	0百万円

なお、当該担保資産は、在外支店の納税番号登録の保証に供しております。

※2 関係会社に対する金銭債権及び金銭債務

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
短期金銭債権	1,036百万円	1,071百万円
短期金銭債務	987百万円	1,378百万円

3 保証債務

次の関係会社の金融機関からの借入に対し、債務保証を行っております。

なお、当該債務保証について、保証料を受領しております。

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
INFOTRACK TELEMATICS PRIVATE LIMITED	64百万円 (38百万円INR)	一百万円

上記の外貨建保証債務は決算日の為替相場により円換算しております。

(損益計算書関係)

※1 関係会社との取引高

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
営業取引による取引高		
売上高	3,291百万円	3,622百万円
仕入高	5,659百万円	6,508百万円
販売費及び一般管理費	187百万円	202百万円
営業取引以外の取引による取引高	1,327百万円	1,053百万円

※2 販売費及び一般管理費のうち主要な費目及び金額は、次のとおりであります。

	前事業年度 (自 平成27年4月1日 至 平成28年3月31日)	当事業年度 (自 平成28年4月1日 至 平成29年3月31日)
給料及び手当	6,377百万円	6,667百万円
役員賞与引当金繰入額	59	84
役員株式給付引当金繰入額	—	22
退職給付引当金繰入額	81	101
賃借料	1,477	1,477
減価償却費	503	429
貸倒引当金繰入額	8	41
その他	4,658	5,019
計	13,164百万円	13,842百万円

販売費に属する費用のおおよその割合

71%

68%

一般管理費に属する費用のおおよその割合

29%

32%

(有価証券関係)

前事業年度（平成28年3月31日）

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額 子会社株式7,635百万円、関連会社株式410百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

当事業年度（平成29年3月31日）

子会社株式及び関連会社株式（貸借対照表計上額 子会社株式8,785百万円、関連会社株式461百万円）は、市場価格がなく、時価を把握することが極めて困難と認められることから、記載しておりません。

(税効果会計関係)

1. 繰延税金資産及び繰延税金負債の発生の主な原因別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
繰延税金資産		
たな卸資産評価損	650百万円	883百万円
投資有価証券・関係会社株式評価損	947	950
ゴルフ会員権等評価損	39	39
ソフトウェア償却限度超過額	433	507
貸倒引当金	30	42
賞与引当金	441	587
退職給付引当金	11	15
役員退職慰労引当金	16	16
役員株式給付引当金	—	6
未払事業税	69	102
その他	421	389
繰延税金資産小計	3,062百万円	3,542百万円
評価性引当額	△1,050	△1,057
繰延税金資産合計	2,012百万円	2,484百万円
繰延税金負債		
前払年金費用	△276百万円	△293百万円
固定資産圧縮積立金	△20	△19
その他有価証券評価差額金	△187	△218
その他	△0	△0
繰延税金負債合計	△485百万円	△532百万円
繰延税金資産（負債）の純額	1,527百万円	1,952百万円

2. 法定実効税率と税効果会計適用後の法人税等の負担率との間に重要な差異があるときの、当該差異の原因となった主要な項目別の内訳

	前事業年度 (平成28年3月31日)	当事業年度 (平成29年3月31日)
法定実効税率	32.8%	30.6%
(調整)		
交際費等永久に損金に算入されない項目	1.5	1.4
受取配当金等永久に益金に算入されない項目	△13.2	△7.6
住民税均等割	3.0	2.4
外国税額控除等の税額控除項目	0.0	△0.0
評価性引当額の増減	0.2	0.6
税率変更による期末繰延税金資産の減額修正	3.7	—
その他	△0.1	0.0
税効果会計適用後の法人税等の負担率	27.9%	27.4%

(企業結合等関係)

(取得による企業結合)

連結財務諸表「注記事項（企業結合等関係）」に記載しているため、注記を省略しております。

(重要な後発事象)

該当事項はありません。

④【附属明細表】

【有形固定資産等明細表】

(単位：百万円)

区分	資産の種類	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期償却額	当期末残高	減価償却累計額
有形固定資産	建物	3,943	103	6	186	3,854	2,494
	構築物	78	—	—	6	71	106
	機械及び装置	15	—	—	1	14	6
	車両運搬具	8	3	—	3	8	30
	工具、器具及び備品	458	72	5	131	394	1,409
	土地	3,921	—	1 (0)	—	3,919	—
	リース資産	749	43	—	362	429	882
	建設仮勘定	6	214	179	—	42	—
	計	9,181	436	192 (0)	692	8,734	4,930
無形固定資産	ソフトウェア	8,142	※1 2,920	149 (119)	3,049	7,864	27,289
	その他	1,745	2,645	2,962	0	1,428	1
	計	9,888	5,566	3,112 (119)	3,049	9,293	27,290

(注) ※1. ソフトウェアの当期増加額の主な内容は、各種データベース制作システム2,291百万円であります。

2. 無形固定資産その他に含むソフトウェア仮勘定の当期増加額のうち、当期に完成し利用を開始したものは当期中にソフトウェアへ振替えられております。

3. 「当期減少額」欄の()内は内書きで、減損損失の計上額であります。

【引当金明細表】

(単位：百万円)

科目	当期首残高	当期増加額	当期減少額	当期末残高
単行本在庫調整引当金	412	386	412	386
貸倒引当金	100	50	11	139
役員賞与引当金	59	84	59	84
役員退職慰労引当金	55	—	—	55
役員株式給付引当金	—	22	—	22

(注) 単行本在庫調整引当金は、商品及び製品より直接控除しております。

(2) 【主な資産及び負債の内容】

連結財務諸表を作成しているため、記載を省略しております。

(3) 【その他】

該当事項はありません。

第6【提出会社の株式事務の概要】

事業年度	4月1日から3月31日まで
定時株主総会	6月中
基準日	3月31日
剰余金の配当の基準日	9月30日 3月31日
1単元の株式数	100株
単元未満株式の買取り・買増し (注1)	
取扱場所	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社 証券代行部
株主名簿管理人	(特別口座) 東京都千代田区丸の内一丁目4番5号 三菱UFJ信託銀行株式会社
取次所	_____
買取・買増手数料	無料
公告掲載方法(注2)	電子公告
株主に対する特典	該当事項はありません。

(注) 1 単元未満株式の買増し

受付停止期間 当社基準日の10営業日前から基準日に至るまで

- 2 電子公告によることができない事故その他やむを得ない事由が生じたときは、日本経済新聞に掲載して行います。
- 3 当社定款の定めにより、当会社の株主は、その有する単元未満株式について、次に掲げる権利以外の権利を行使することができないこととされています。
 - (1) 会社法第189条第2項各号に掲げる権利
 - (2) 会社法第166条第1項の規定による請求をする権利
 - (3) 株主の有する株式数に応じて募集株式の割当て及び募集新株予約権の割当てを受ける権利
 - (4) 単元未満株式の買増請求をする権利

第7【提出会社の参考情報】

1【提出会社の親会社等の情報】

当社は、法第24条の7第1項に規定する親会社等はありません。

2【その他の参考情報】

当事業年度の開始日（平成28年4月1日）から有価証券報告書提出日までの間に、次の書類を提出しております。

- | | | | |
|--|----------------|-------------------------------|--------------------------|
| (1) 有価証券報告書
及びその添付書類
並びに確認書 | 事業年度
(第56期) | 自 平成27年4月1日
至 平成28年3月31日 | 平成28年6月20日
関東財務局長に提出 |
| (2) 内部統制報告書及びその添付書類 | | | 平成28年6月20日
関東財務局長に提出 |
| (3) 四半期報告書
及び確認書 | 第57期第1四半期 | 自 平成28年4月1日
至 平成28年6月30日 | 平成28年7月29日
関東財務局長に提出 |
| | 第57期第2四半期 | 自 平成28年7月1日
至 平成28年9月30日 | 平成28年10月31日
関東財務局長に提出 |
| | 第57期第3四半期 | 自 平成28年10月1日
至 平成28年12月31日 | 平成29年1月31日
関東財務局長に提出 |
| (4) 臨時報告書
企業内容等の開示に関する内閣府令第19条第2項第9号の2
(株主総会における議決権行使の結果)に基づく臨時報告書であります。 | | | 平成28年6月20日
関東財務局長に提出 |
| | | | 平成29年6月19日
関東財務局長に提出 |
| (5) 有価証券届出書（第三者割当による自己株式の処分）
及びその添付書類 | | | 平成28年8月23日
関東財務局長に提出 |
| | | | 平成29年2月21日
関東財務局長に提出 |
| (6) 訂正有価証券届出書
平成28年8月23日提出の有価証券届出書に係る訂正届出書であります。 | | | 平成28年9月2日
関東財務局長に提出 |

第二部【提出会社の保証会社等の情報】

該当事項はありません。

独立監査人の監査報告書及び内部統制監査報告書

平成29年6月19日

株式会社 ゼンリン
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員

公認会計士


業務執行社員

磯 栄 吉 平 

指定有限責任社員

公認会計士


業務執行社員

事 田 篤 芳 

指定有限責任社員

公認会計士

業務執行社員

室 井 秀 夫 

<財務諸表監査>

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社ゼンリンの平成28年4月1日から平成29年3月31日までの連結会計年度の連結財務諸表、すなわち、連結貸借対照表、連結損益計算書、連結包括利益計算書、連結株主資本等変動計算書、連結キャッシュ・フロー計算書、連結財務諸表作成のための基本となる重要な事項、その他の注記及び連結附属明細表について監査を行った。

連結財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して連結財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない連結財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から連結財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に連結財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、連結財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による連結財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、連結財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての連結財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の連結財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社ゼンリン及び連結子会社の平成29年3月31日現在の財政状態並びに同日をもって終了する連結会計年度の経営成績及びキャッシュ・フローの状況をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

＜内部統制監査＞

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第2項の規定に基づく監査証明を行うため、株式会社ゼンリンの平成29年3月31日現在の内部統制報告書について監査を行った。

内部統制報告書に対する経営者の責任

経営者の責任は、財務報告に係る内部統制を整備及び運用し、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して内部統制報告書を作成し適正に表示することにある。

なお、財務報告に係る内部統制により財務報告の虚偽の記載を完全には防止又は発見することができない可能性がある。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した内部統制監査に基づいて、独立の立場から内部統制報告書に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の監査の基準に準拠して内部統制監査を行った。財務報告に係る内部統制の監査の基準は、当監査法人に内部統制報告書に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき内部統制監査を実施することを求めている。

内部統制監査においては、内部統制報告書における財務報告に係る内部統制の評価結果について監査証拠を入手するための手続が実施される。内部統制監査の監査手続は、当監査法人の判断により、財務報告の信頼性に及ぼす影響の重要性に基づいて選択及び適用される。また、内部統制監査には、財務報告に係る内部統制の評価範囲、評価手続及び評価結果について経営者が行った記載を含め、全体としての内部統制報告書の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、株式会社ゼンリンが平成29年3月31日現在の財務報告に係る内部統制は有効であると表示した上記の内部統制報告書が、我が国において一般に公正妥当と認められる財務報告に係る内部統制の評価の基準に準拠して、財務報告に係る内部統制の評価結果について、すべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以 上

独立監査人の監査報告書

平成29年6月19日


株式会社 ゼンリン
取締役会 御中

有限責任監査法人 トーマツ

指定有限責任社員

公認会計士

業務執行社員

磯谷 圭平 

指定有限責任社員

公認会計士

業務執行社員

本田 篤芳 

指定有限責任社員

公認会計士

業務執行社員

室井 秀夫 

当監査法人は、金融商品取引法第193条の2第1項の規定に基づく監査証明を行うため、「経理の状況」に掲げられている株式会社ゼンリンの平成28年4月1日から平成29年3月31日までの第57期事業年度の財務諸表、すなわち、貸借対照表、損益計算書、株主資本等変動計算書、重要な会計方針、その他の注記及び附属明細表について監査を行った。

財務諸表に対する経営者の責任

経営者の責任は、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して財務諸表を作成し適正に表示することにある。これには、不正又は誤謬による重要な虚偽表示のない財務諸表を作成し適正に表示するために経営者が必要と判断した内部統制を整備及び運用することが含まれる。

監査人の責任

当監査法人の責任は、当監査法人が実施した監査に基づいて、独立の立場から財務諸表に対する意見を表明することにある。当監査法人は、我が国において一般に公正妥当と認められる監査の基準に準拠して監査を行った。監査の基準は、当監査法人に財務諸表に重要な虚偽表示がないかどうかについて合理的な保証を得るために、監査計画を策定し、これに基づき監査を実施することを求めている。

監査においては、財務諸表の金額及び開示について監査証拠を入手するための手続が実施される。監査手続は、当監査法人の判断により、不正又は誤謬による財務諸表の重要な虚偽表示のリスクの評価に基づいて選択及び適用される。財務諸表監査の目的は、内部統制の有効性について意見表明するためのものではないが、当監査法人は、リスク評価の実施に際して、状況に応じた適切な監査手続を立案するために、財務諸表の作成と適正な表示に関連する内部統制を検討する。また、監査には、経営者が採用した会計方針及びその適用方法並びに経営者によって行われた見積りの評価も含め全体としての財務諸表の表示を検討することが含まれる。

当監査法人は、意見表明の基礎となる十分かつ適切な監査証拠を入手したと判断している。

監査意見

当監査法人は、上記の財務諸表が、我が国において一般に公正妥当と認められる企業会計の基準に準拠して、株式会社ゼンリンの平成29年3月31日現在の財政状態及び同日をもって終了する事業年度の経営成績をすべての重要な点において適正に表示しているものと認める。

利害関係

会社と当監査法人又は業務執行社員との間には、公認会計士法の規定により記載すべき利害関係はない。

以上